

17 『ウルトラマリリンブルー・クリスマス／シリウス版』 成井豊

○ ジャンル／ファンタジー

○ ストーリー／昭和58年のクリスマスイブ。長野県笛田市で建設会社を経営している辺見鐘司は、自殺を決意して、町外れの川にやってくる。橋から身を投げようとすると、横から誰かが飛び下りた！ 辺見はその人物を助けるため、慌てて川の中へ！ 次に目を開けると、辺見はバス停にいた。隣には、先に飛び下りた人物。その人物は、自分はシリウスという名の天使で、辺見の自殺を止めようとして、誤って落ちたと言う。天使は辺見に、なぜ死のうとしたのか聞く。辺見は語る。そもそもの始まりは昭和36年、辺見が高校2年の時だった……。

○ 出演者／男7＋女8 計 15

○ 上演時間／120分

登場人物

辺見鐘司	(建設会社社長)
シリウス	(二級天使)
ベテルギウス	(一級天使)
プロキオン	(二級天使)
辺見碧	(鐘司の妻)
辺見義一	(鐘司の父)
辺見友枝	(鐘司の母)
辺見忠子	(鐘司の叔母)
辺見雪也	(鐘司の弟)
樫本洋代	(雪也の婚約者)

堀田兵士郎
平岡ゆかり
川地健夫
長門秀之
辺見鈴花

(不動産会社社長)
(堀田の秘書)
(喫茶店店主)
(鐘司の友人)
(鐘司の娘)

① 暗闇の中、バスがドアを閉めて、発車する音。明るくなると――
一九八三年十二月二十四日夜、バス停。辺見鐘司とシリウスが立っている。

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

（周囲を見回して）えーと、ここは？

天国の一つ手前の停留所。名前は「監視所」です。

監視所？

地上の様子を監視する施設です。ここでは常時、一万人の天使が業務に当たっています。

何が一人だ。僕ら以外に誰もいないじゃないですか。

監視所は私たちの足の下、雲の下にあるんです。私もついさっきまでそこで

仕事をしてたんですよ。

つまり、あなたも天使ってわけですか。

だから、さっきからそう言ってるでしょう。私はあなたを助けるために、地

上へ下りたんです。

あなたのお名前は？

シリウス。

ぷろきおん？ 漢字はどう書くんです。

漢字じゃなくて、片仮名でシリウスです。

鐘司

シリウス

鐘司

でも、あなたはどこからどう見ても、日本人だ。普通、天使は西洋人で、背中に羽が生えてるはずだ。
天使には階級というものがあるんです。私はまだ新米なので、階級は二級。一級にならないと、羽はもらえません。
だったら、ここに一級の天使を連れてきてください。背中に羽が生えてる天使を。

そこへ、ベテルギウスがやってくる。背中に羽をつけている。

ベテルギウス

鐘司

ベテルギウス

鐘司

ベテルギウス

鐘司

ベテルギウス

鐘司

ベテルギウス

シリウス

鐘司

ベテルギウス

鐘司

ベテルギウス

辺見鐘司さんですね？
そうですね、あなたは？
初めまして。この監視所の所長をつとめている、ベテルギウスです。
その羽は本物ですか？
ええ、もちろんです。私は一級天使なので、このサイズですが、階級が上がると、もっと大きくなります。
そんなものをつけてると、動きにくくないですか？
そうでもないですよ。見た目ほど重くないし、寝る時は外せるし。
外せるんですか？
当たり前でしょう。これをつけたままで、寝られると思いますか？ 背中が痛くて、一睡もできませんよ。
(鐘司に) これで信じてくれましたか？
しかし……。
(手を叩いて) プロキオン。

そこへ、プロキオンがやってくる。

フロキオン お呼びですか？
ベテルギウ 辺見さん、何か飲み物はいかがですか？

鐘司 僕は喉は渴いてませんが。
ベテルギウ それはそうです。今のあなたには肉体がありませんからね。しかし、飲み物は喉を潤すだけでなく、心を寛がせる効果があります。

鐘司 じゃ、お茶を。

プロキオン レモンティーとミルクティーと、どちらになさいますか？
鐘司 僕は日本茶がいいんですが。

ベテルギウ (プロキオンに) 狭山茶の高いやつがあったでしょう。あれを淹れてきて。
プロキオン かしこまりました。

プロキオンが去る。

鐘司 本当にあるとは思いませんでした。日本茶。

ベテルギウ 見ておわかりの通り、私も天使になる前は日本人でした。たまにどうしても飲みたくなるんです。さて、辺見さん、そろそろ本題に入りたいのですが。

鐘司 本題と言いますと？
ベテルギウ この度は、私の部下がとんでもない不始末をしでかしまして、本当に申し訳

シリウス ありませんでした。(頭を下げて) シリウス。
(鐘司に) 申し訳ありませんでした。(頭を下げる)

鐘司
シリウス

鐘司

シリウス

鐘司
シリウス

鐘司
シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

いきなり謝られても、僕には事情がよくわかってないんですが。説明します。一九八三年十二月二十四日午後十時三十七分、私は部下のシリウスに対し、長野県笛田市へ急行し、辺見鐘司氏の自殺を食い止めるように指示しました。シリウスは直ちに、三隈川にかかる笛田橋へ急行。橋から飛び下りようとすするあなたに掴みかかった。それは覚えていません。橋の上から川を覗き込んでいたら、いきなり誰かが後ろから抱きついてきたんだ。それは私です。僕は咄嗟に、相手の手を振り払った。僕は二メートルも撥ね飛ばされた。コンニャロメーと思って、もう一度飛びかかったら。僕は横へ飛びのいた。あなたが飛びのくのは見えただけ、体は急に止まれない。私は欄干に激突して、頭から下へ落ちた。僕はすぐに下を覗いた。白い服の男が水面で浮き沈みしながら流されていく。さては泳げないのか？ 恥ずかしながら、金槌なんです。このままでは死んでしまう。僕は欄干に飛び乗り、川へ飛び込んだ。川の水はゾツとするほど冷たかったけど、そんなの気にしてる場合じゃない。十メートルほど先を流されていくあなたに向かって、必死で泳いだ。あなたのクロール、実に見事なフォームでした。あなたが金槌じゃなくて、助かった。僕はあなたの体を掴むと、岸に向かって、泳ぎ始めた。しかし、岸は遠く、

シリウス
あなたは激しかった。それでも必死で泳いで、泳いで、そして……。
あなたは何とか岸に辿り着いた。と同時に、意識を失った。

ベテルギウ
（鐘司に）あなたは川へ飛び込む前に、大量のアルコールを摂取していた。
そんな状態で真冬の川へ飛び込んで、全力で泳いだんです。当然、心臓に急
激な負担がかかった。あなたは心筋梗塞を発症し、午後十時四十二分、心肺
停止の状態に陥りました。

鐘司

つまり、死んだわけですか。

ベテルギウ

自分のせいで人を死なせるなんて、天使として許されざる行為です。この任
務が成功すれば、一級天使に昇格して、羽がもらえる。そう思って、功を焦
ったに違いありません。そうでしょう、シリウス？
仰る通りです。（鐘司に）本当に申し訳ありませんでした。（頭を下げる）

シリウス

そこへ、プロキオンがやってくる。湯飲みを四つ持ってくる。

プロキオン

お待たせしました。

ベテルギウ

ご苦労様。ささ、辺見さん、お茶をどうぞ。

鐘司

いただきます。（飲んで）うん、おいしい。死んだら何もかもおしまいかと
思ってたけど、こんなにおいしいお茶が飲めるなんて。ひよっとして、お酒
もあるんですか？

プロキオン

ええ、もちろんです。ここには大したものはありませんが、天国へ行けば、あり

鐘司

とあらゆるお酒が手に入ります。

プロキオン

亡くなった父にも会えますかね？

鐘司

ええ、地獄へ行つてなければ。

ベテルギウ

プロキオン、あなたは口を閉じてなさい。さて、辺見さん、ここであなたにお願いがあります。今すぐ地上へ戻っていただきたいんです。

鐘司
ベテルギウ

でも、僕はもう死んだですよね？

鐘司
ベテルギウ

それはそうですが、そもそもあなたは今日死ぬべき運命ではなかった。あなたが亡くなつたのは、あくまでもシリウスのミスなのです。

シリウス

(鐘司に)私と一緒に地上へ戻ってください。お願いします。

鐘司
ベテルギウ

申し訳ないけど、僕はこのまま死にたい。天国へ行きたいです。

ベテルギウ

天国へ行つてしまつたら、二度と地上へは戻れません。ご家族にもご友人にも会えなくなるんですよ。

鐘司
ベテルギウ

それは仕方ありません。

鐘司
ベテルギウ

仕方ないとは、どういうことです。

ベテルギウ

僕は死んだ方がいい。その方が、家族や友人が幸せになるんです。僕を天国へ行かせてください。お願いします。

鐘司
ベテルギウ

それは困る。あなたがこのまま天国へ行つたら、私はあなたを殺したことになる。

シリウス

それは違う。僕の死は単なる病死だ。誰のせいでもない。

鐘司
シリウス

わからないなあ。あなたの寿命はまだ何十年も残つてる。今は困難な状況かもしれないけど、やり直す時間はいくらだってあるじゃないですか。

鐘司
ベテルギウ

なぜそう言い切れるんです。僕のことなど何も知らないくせに。

ベテルギウ

話したら、話してみてくださいませんか。あなたがなぜ天国へ行きたいのか。

鐘司
ベテルギウ

約束しましょう。あなたの話が納得できたら、次の天国行きのバスにあなたを乗せると。

ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司
ベテルギウ

話を聞かせてください。

ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司
ベテルギウ

話を聞かせてください。

ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司
ベテルギウ

話を聞かせてください。

ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司
ベテルギウ

話を聞かせてください。

ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司
ベテルギウ

話を聞かせてください。

ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司
ベテルギウ

話を聞かせてください。

鐘司

わかりました。(お茶を飲んで) あなた方を納得させるためには、少々長い話をしなければなりません。僕がどんなふう生きてきたか、あなた方に知ってもらいたいです。

ベテルギウ

プロキオン、記録を取りなさい。

プロキオン

(紙とペンを示して) 準備できてます。

ベテルギウ

辺見さん、始めてください。

鐘司

僕は一九四四年に長野県の笛田市で生まれました。

鐘司が出会った人々が次々と通りすぎていく。

鐘司

僕は一九四四年に長野県の笛田市で生まれました。笛田市は山に囲まれた、小さな町です。父は小さな建設会社を経営していました。僕は長男で、高校を卒業したら、父の会社に入り、ゆくゆくは跡を継ぐつもりでした。ところが、僕が十七歳の時、人類の歴史に残る大事件が起きたんです。それは、一九六一年の四月のことでした。

①一九六一年四月夕、鐘司の家。辺見義一が椅子に座って、新聞を読んでいる。

鐘司

ただいま。あれ、お父さん、今日は仕事は？

義一

朝から風邪気味でな。忠子に任せて、早退けさせてもらった。

鐘司

医者へは行ったの？

義一

風邪ぐらいで行くもんか。今夜たっぷり寝れば、すぐに元に戻る。

そこへ、辺見友枝がやってくる。

友枝

あら、鐘司、今日は早かったんだね。野球部の練習はなかったの？

鐘司

あったけど、出なかった。僕は野球部を辞めたんだ。

友枝

辞めた？ どうして。

鐘 友
枝 司

鐘 義 鐘
枝 司 一 司

鐘 友 鐘 友 鐘
枝 司 枝 司 司

鐘 友 鐘 義
枝 司 一 一

他にやりたいたいことが見つかったんだ。

でも、おまえはエースだろう？ この前の大会で準決勝まで行けたのは、おまえが連戦連投したからじゃないか。今度は絶対に優勝するんだって、張り切ってたのに。

監督にはこっぴどく叱られたよ。でも、最後はわかってくれた。

それで、やりたいたいことってというのは何なんだ。

勉強だよ。

何を今さら。おまえは小学校の頃から成績がよかった。高校に入ってからだって、学年で十番より下に落ちたことはないじゃないか。

一番にならなきゃダメなんだ。それも、ぶっちぎりの一番に。

何のために。東大へ行って、学者にでもなろうって言うの？

お母さん、今朝の新聞は読んだ？ ガガーリンの記事。

読んだ読んだ。ロケットで宇宙へ行った人だろう？

ソビエト連邦の宇宙飛行士ユーリー・ガガーリン。ボストーク一号に乗って、世界初の有人宇宙飛行を成し遂げたんだ。ボストーク一号は地球の周回軌道を一時間五十分で一周した。地上へ帰還した後、ガガーリンはこう言ったんだ。

地球は青かった。

僕が言いたかったのに。

まさか、おまえもガガーリンみたいに、宇宙へ行きたいって言うんじゃないだろうね？

それは無理だよ。僕は左の耳が聞こえない。ロケットに乗るのは無理だと思う。でも、作ることができる。

義一
鐘司

作るって、ロケットをか？

図書室で調べたんだ。日本では、今から九年前に、東大の糸川英夫教授が生産技術研究所っていうのを作って、ロケットの開発を始めた。今月の初めには、日本初の三段式ロケットの発射に成功した。近い将来、日本のロケットも人間を乗せて、宇宙へ行く。それを僕は作りたいんだ。

義一
友枝

うちの会社はどうなる。
そうだよ、鐘司。おまえは長男なんだから、お父さんの跡を継ぐ責任があるだろう。

鐘司
義一

それはそうだけど、僕は家より、ロケットが作りたい。
うちの会社はどうなってもいいと言うのか。

そこへ、辺見雪也がやってくる。

雪也

お父さんの跡は僕が継ぐよ。だから、お兄さんは自分のやりたいことをやればいい。

義一

横から口を出すな。

雪也
友枝

でも、これは辺見家の問題だろう？ だったら、僕にも発言する権利はある。偉そうなことを言うんじゃないよ。おまえに社長の仕事がつとまるわけない。成績だって、下から数えた方が早いじゃないか。

雪也

僕もお兄さんと一緒に勉強する。お兄さんみたいに、学年で十番以内に入つてみせるよ。(義一に) だから、お兄さんの言う通りにしてあげてよ。

鐘司
雪也

いいのか、雪也。
お兄さんの左耳が聞こえなくなつたのは、僕のせいだ。川に落ちた僕を助け

義一

雪也

義一

鐘司

義一

鐘司

義一が去る。

友枝

鐘司

雪也

友枝

ようして、流れに巻き込まれて。だから、今度は僕がお兄さんを助ける。
大きな口を叩くな。おまえなんか社長は無理だ。
頭から決めつけないでよ。僕は努力する。
（鐘司に）自分の責任を弟に押しつけるなんて、みっともないとは思わないのか。
すみません。でも、僕はどうしてもロケットが作りたいです。
俺の言うことが聞けないなら、一切協力はしない。大学の学費は自分で払え。
わかったよ。

友枝・雪也が去る。

シリウス

鐘司

（鐘司に）つまり、ガガーリンがあなたの人生を変えたというわけですか。
ええ。でも、本当のことを言うと、僕は春の大会で肩を傷めたんです。監督

ベテルギウス
シリウス
から「もう投手は無理だ、外野手に転向しろ」って言われていた。
つまり、逃げたわけですか。
シリウス、そんな言い方をしたら、失礼ですよ。
いや、そう言われても仕方ない。もし肩が万全だったら、野球を辞めようなんて思わなかったかもしれない。でも、当時の僕は、このまま続けるべきかどうか迷っていた。ガガーリンのニュースは、僕にとって救いだった。これだっと思ってたんです。

ベテルギウス
シリウス
ロケットには前から興味があったんですか？

シリウス
いいえ、全然。
それならどうしてこれだと思ったんです。
僕はピッチャーだったんですが、バッティングも好きだった。ホームランを打った時の気分は最高でした。青い空へ向かって舞い上がっていく白い球。

ベテルギウス
シリウス
あの球を宇宙まで飛ばすことができたなら凄いやなと思ってたんです。
それで、次の日から猛勉強？

シリウス
プロキオン
ええ。それと同時に、学費を稼ぐために、アルバイトを始めました。
どこでどんな仕事を？
笛田駅の駅前の喫茶店「オードリー」でウェイターの仕事を。

②一九六一年四月夕、喫茶店。川地健夫がやってくる。

川地
遅かったな、辺見君。
鐘司
すみません、川地さん。図書室で勉強してたら、五時を過ぎたのに気づかなくて。

川地

遅刻した分は給料から引いておくから、気にしなくていい。それより、今日もファンがお待ちかねだぞ。

鐘司

また彼女たちですか。

川地

鐘司

君が働き始めてから、女性客がたくさん来るようになった。感謝してるよ。何かご褒美は？

鐘司が平岡ゆかり・ミエ・マリに歩み寄る。川地が去る。

鐘司

ゆかり

君たち、また来たのか？ 先生に見つかつたら、叱られるぞ。そう言う辺見先輩はどうなんですか？ うちの高校、アルバイトは禁止ですよ？

鐘司

マリ

僕は教頭先生に頼んで、特別に許可をもらったんだ。それより、ご注文は？ チョコパフェとバナナパフェとストロベリーパフェ。

鐘司

ミエ

毎日甘いものばかり食べて、よく飽きないな。値段も高いのに。実は、ゆかりのおごりなんです。ゆかりはお金持ちだから。

私じゃなくて、伯父さんよ。(鐘司に) 私の伯父は堀田不動産の社長なんです。伯父には子供がいらないから、私を娘みたいにかわいがってくれて。遊びに行くたびにお小遣いをくれるんです。

そこへ、長門秀之がやってくる。

長門 鐘司 長門
鐘司、注文を取ったら、さっさと言いに来いよ。
あ、ごめん。チョコパフェとバナナパフェとストロベリーパフェだつて。
野球部のエースだったか何だか知らないけど、あまりいい気になるなよ。仕
事中に私語は謹め。
ミエ ちよつと、辺見先輩を苛めないでよ。
長門 苛めてるんじゃない。先輩として、注意してるんだ。
ミエ あら、お客様に向かって、その口のきき方はないんじゃない？
ゆかりマリ そうだそうだ！
長門 うるさい！ 静かにしろ！

そこへ、川地がやってくる。

川地 鐘司 長門君、お客様に向かって、その口のきき方は何だ。
鐘司 悪いのは僕です。長門君は僕に注意しようとしていただけで。
川地 うちの店の名前はオードリー。オードリー・ヘップバーンのようにシックで
エレガントな店というのが売り文句なんだ。ウェイターの君たちにも、当然、
シックでエレガントであってほしい。
鐘司 努力します。
（川地に）俺もです。
長門 辺見先輩はともかく、長門さんには難しいんじゃないかな。
ミエ 何だと？
長門 待ちなさい、長門君。シックでエレガントなウェイターは「何だと？」なん
川地 て言わない。「何と仰いましたか？」と言うんだ。はい、復唱。

長門

何と仰いましたか？

鐘司

長門、おまえ、今、厨房で何をしてた？

長門

何と仰いましたか？

鐘司

いいから答える。何か料理は作ってたか？

長門

俺はコップを洗ってた。

鐘司

川地さんは？

川地

コーヒー豆を焙煎してた。でも、なぜそんなことを聞くんだ。

鐘司

みんな、今すぐ表へ出て。静かに、音をたてないように。

ゆかり

ミエ、マリ、辺見先輩の言う通りにしよう。

長門・ゆかり・ミエ・マリが去る。

川地

辺見君、一体何がどうしたんだ。

鐘司

匂いませんか？ ガスの匂いですよ。

川地

まさか。

鐘司

僕が確かめてきます。川地さんは外で待っていてください。

鐘司が去る。

川地

辺見君、大丈夫か！ ガスは止まったか！ なぜ返事をしない！

つて、気を失ったのか！ どうなんだ、辺見君！

ガスを吸

鐘司が走ってきて、ひざまずく。長門・ゆかり・ミエ・マリがやってくる。

川地
鐘司

大丈夫か、辺見君！

ガスが充満してたんで、ずっと息を止めてたんです。ガスレンジが不完全燃

川地
鐘司

焼を起こしてました。ガスレンジを使っていたのは私だ。火を止めて、窓を全部開けてきました。もう心配はいりません。

鐘司が倒れる。川地・長門・ゆかり・ミエ・マリが去る。

ベテルギウ (拍手して) すばらしい! あなたは自分の身を挺して、川地さんたちを助

けた。この行為だけでも、天国へ行く資格があります。

所長、彼に天国へ行かれては困るんですよ。

わかってますよ。私は辺見さんの行為を褒めただけです。

(鐘司に) 川地さんは給料を上げてくれたんじゃないですか?

いいえ。かわりに僕の手を握って、感謝してると。

また言葉だけですか?

でも、多少の遅刻は目をつぶってくれるようになりました。僕はオードリ

で毎日五時間働きました。おかげで、貯金は着々と増えていきました。

問題は勉強ですね。成績も着々と上がったんですか?

おかげさまで。でも、東大は超難関校だから、簡単には受からなかった。最

初の受験は不合格。一浪して受けた二回目も不合格。

ということは、二浪したんですか?

三回目の受験は一九六四年の三月。僕は二十歳になっていました。

①一九六四年三月夕、辺見家。友枝・雪也がやってくる。

雪也 お兄さん、合格おめでとう! 現在の心境は?

鐘司 うれしいって言うより、ホツとしてる。今年が最後のチャンスだと思ってたんで。

雪也 落ちたら、東大は諦めるつもりだったの？

鐘司 長男がいつまでもフラフラしてるわけには行かないからな。

友枝 フラフラなんかしてなかったじゃないか。おまえはこの三年間、本当によく頑張った。入学式まで、のんびりするといよ。

鐘司 そういうわけには行かないんだ。僕はまだスタートラインに立ったに過ぎない。大学でいい成績を取らないと、生産技術研究所には入れないんだ。

雪也 それじゃ、今日からまた勉強？

鐘司 とりあえず、英語の力をもっとつける。英語の論文がスラスラ読めるようになりたいたいから。

友枝 わかった。でも、今夜はぐらいは家族みんなでお祝いしよう。久しぶりに、お寿司でも取るうか。

友枝

そこへ、義一がやってくる。

雪也 あれ、お父さん、もう帰ってきたの？

義一 忠子の風邪が移ったみたいだ。大事を取って、帰ってきた。それに、そろそろ結果がわかった頃かと思つて。

雪也 合格だよ。お兄さんはいに東大に合格したんだ。

友枝 (義一に) 今夜はお寿司でも取ろうかって言つてたんですよ。いいですよ？

義一 もちろんだとも。鐘司、合格おめでとう。

鐘司 ありがとうございます。お父さんがそう言ってくれるとは思わなかったよ。

鐘司

義一 雪也

鐘一 義一

鐘一 義一 鐘一 義一 鐘一 義一

義一 鐘一 友枝 雪也 友枝

自分の息子が日本の最高学府に入ったんだ。喜ばない親がいるもんか。じゃ、お兄さんがロケットを作ることも認めてくれるんだね？
なあ、鐘司。東大へ行ったら、建築の勉強をしてみないか。ロケットを作るのはすばらしい仕事だが、家を作るのはそれに負けないぐらいの価値があるぞ。

それはよくわかってるよ。

本当にそうか？ 今の日本を見回してみろ。戦争の傷跡はようやく癒えたが、庶民は相変わらず貧しい。今の庶民の夢は、自分の家を持つことだ。俺はその夢を叶えるために、少しでも安くて、いい家を作ろうとしている。

そのおかげで、会社はちっとも儲からないけどね。
そのかわり、たくさんの人が喜んでくれる。

僕が作ったロケットが宇宙へ行ったら、日本中の人が喜んでくれるよ。

しかし、それは一瞬の話だ。

お父さん、僕はお父さんを尊敬してる。お父さんはたくさんの人たちを幸せにしたと思う。でも、それはこの町の中だけの話じゃないか。僕はもつと大きなことがしたい。百人や二百人じゃない。一億人を幸せにするような仕事

がしたいんだ。

俺のしていることは小さいことか。

ごめん。でも、僕はどうしてもロケットが作りたいんだ。

わかった。

じゃ、私は寿司屋に電話してきますからね。
せっかくのお祝いなんだからさ、並じゃなくて、上にしようよ。
何言ってるの。東大は日本の最高学府なんだよ。お寿司も当然、特上だよ。

鐘司

(ベテルギウスに) 一週間後の夜、オードリーの川地さんが送別会を開いてくれました。

② 義一・友枝・雪也が去る。
一九六四年三月夕、喫茶店。川地がやってくる。

川地

早かったな、辺見君。

鐘司

僕も何かお手伝いしようと思って。

川地

君は今夜の主賓なんだ。何もする必要はない。そこに座って、スピーチのネタでも考えていたまえ。

鐘司

スピーチをするんですか？　そういう堅苦しいのはやめにして、パーツとやりませんか？

川地

主賓は君だが、主催は私だ。私好みの、シックでエレガントな送別会にさせてもらう。

鐘司

了解しました。川地さん、三年間、お世話になりました。

川地

お礼を言うのはこっちの方だ。私がこうして店を続けてこられたのは、みんな君のおかげだ。君が事故を未然に防いでくれたから。

そこへ、ゆかり・ミエ・マリがやってくる。

ゆかり

あれ？ 辺見先輩、もう来てたんですか？

鐘司

君たちも出席するの？

川地さんに飾りつけを頼まれたんですよ。ほら、見てください。

ミエ・マリが横断幕を広げる。「辺見鐘司君、東大合格おめでとう！」と書いてある。

川地　「おめでとう」が「おめでとう」になってるぞ。

ゆかり　それ、マリが書いたんです。(マリに)おめでたい席に縁起でもない。送別

マリ　会の最中にガス爆発でも起きたら、どうするのよ。

鐘司　ごめんなさい。今すぐ書き直してきます。

マリ　いいって、いいって。これ書くのに、何時間もかかったんだらう？　その気

鐘司　持ちだけで十分だよ。

三人　辺見先輩、優しい！

鐘司　君たち、今日は学校は？

マリ　早退けしてきたんです。辺見先輩のために。

ミエ　(鐘司に)東京へ行っても、私たちのこと、忘れないでくださいね。

ゆかり　(鐘司に)私たち、十月の東京オリンピック、三人で見に行くんです。その

鐘司　時、東京を案内してくれませんか？

三人　いいよ。それまでに、東京の地理に詳しくなっておく。

川地　辺見先輩、優しい！　おしゃべりはそれぐらいにして、飾りつけを始めて

三人　三人娘、やかましい！

川地　ゆかり・ミエ・マリが去る。そこへ、長門がやってくる。段ボールを持っている。

長門　鐘司、合格おめでとう。

鐘司
長門

鐘司
長門

そこへ、蜂谷碧がやってくる。

ありがとう。買い出しに行ってきたのか？

ああ。それと、ちよつと寄る所があつて。実は、今日の送別会にどうしても出たいてやつがいてな。ここへ連れてきたんだ。中に入れても、構わないか？

もちろんだとも。

(外に向かつて) 碧！

長門

碧

鐘司

碧

鐘司

碧

長門

鐘司

碧

鐘司

碧

鐘司

(鐘司に) こいつは俺の従妹なんだ。碧、挨拶しろ。

(鐘司に) 蜂谷碧です。初めまして。

辺見鐘司です。君の顔には見覚えがあるな。もしかして、同じ高校？

そうです。私は辺見さんの二年後輩です。

ゆかり君と同じ学年か。とすると、君も試合の応援に来てくれたのか？

ごめんなさい。私、野球には興味がなくて。

(鐘司に) こいつは子供の頃から本の虫でな。運動はからつきしダメなんだ。

思い出した。いつも図書室にいた子だ。

そうです。辺見さんは毎日、授業が終わると、図書室に来て、勉強してまし

たよね？ まじめな人だなんて感心してたんです。

君はいつも本を読んだ。地味だけど、きれいな子だなと思つてたんだ。

地味？

今は違う。久しぶりに会つたら、全然地味じゃなくなつてた。よかつたら、君も準備を手伝つてくれないか？

鐘 碧
司

喜んで。
（ベテルギウスに）送別会が終わった後、僕は碧君を家に送っていくことになりました。

③ 長門が去る。
一九六四年三月夕、路上。

鐘 碧
司

今日はいきなり押しかけちゃって、すみませんでした。別に構わないよ。こうして君と知り合いになれたし。私、どうしても辺見さんにおめでとうが言いたかったんです。図書室で勉強する姿をずっと見てたから。

鐘 碧
司

僕も君が本を読む姿を見てた。僕らは三年前から知り合いだったんだな。でも、私のこと、忘れてたでしょう？

鐘 碧
司

ごめん。そう言えば、君は今、三年生だよな？ 卒業した後はどうするの？ 短大へ行きます。司書の資格を取るために。

鐘 碧
司

君は司書を目指してるのか。本当に本が好きなんだな。他にも好きなものはいっぱいありますよ。家へ帰ったら、テレビばかり見えますし。

鐘 碧
司

ひよっとしてカラー？

鐘 碧
司

もちろんですよ。え？ 辺見さんの家はいまだに白黒？ 悪かったな、白黒で。でも、映るものは同じだよ。

鐘 碧
司

私、坂本九ちゃんが大好きなんです。『上を向いて歩こう』とか、『見上げてごらん夜の星を』とか。

鐘司

僕はテレビはあまり見ない。家でも勉強してるんで。辺見さんは東大へ行って、何を研究するんですか？

鐘司

ロケットだよ。アポロ計画って知ってるかい？ アメリカ航空宇宙局が立て

鐘司

た計画で、十年以内に人間を乗せたロケットを月まで飛ばそうっていうんだ。

鐘司

月って、あの月ですか？（空を指さす）

鐘司

そうだよ。僕は間違ひなく成功すると思ってる。そして、いつかは僕も、自

鐘司

分が作ったロケットを月まで飛ばしたい。

鐘司

信じられませんか。人間があんなに遠くまで行くなんて。

鐘司

頭から決めつけちゃいけない。人間には無限の可能性がある。自分が行ける

鐘司

って信じれば、どこまでだって行けるんだ。

鐘司

（空を指さして）あの星にも？

鐘司

ああ。

鐘司

（空を指さして）あの星にも？

鐘司

ああ。何年先になるかわからないけど、必ず行ける。

鐘司

だとしたら、あの星は私たちが来るのをあそこで待ってるんですね。

鐘司

（ベテルギウスに）そう言ってる、碧君は静かに歌い出しました。

プロキオンがギターを弾く。碧が歌う。それを聞いて、鐘司も歌う。

碧

「見上げてごらん夜の星を／小さな星の小さな光が／ささやかな幸せをうた

碧・鐘司

つてる」
「見上げてごらん夜の星を／ボクラのように名もない星が／ささやかな幸せを祈ってる」

そこへ、雪也が走ってくる。

雪也

お兄さん、こんな所で何をしてるんだ。

鐘司

(碧に) 弟の雪也だよ。雪也、俺に何か用か？

雪也

お父さんが会社で倒れたんだ。ついさつき、叔母さんが家まで送ってきてくれた。

鐘司

碧君、悪いけど、一人で帰ってくれ。

碧

大丈夫です。家はすぐ近くですから。

鐘司

気をつけて。雪也、行こう。

碧が去る。

①一九六四年三月夜、辺見宅。辺見忠子がやってくる。

雪也
忠子

叔母さん、お父さんは？

居間にいる。私もお義姉さんも、布団で横になった方がいって言ったんだけど、もう大丈夫だって言い張って。

家へ帰ってきた時は、口もきけない状態だったのに。

(忠子に)なぜ病院へ連れていかなかったの？

雪也
鐘司
忠子

本人が行きたくないって言うんだから、しようがないだろう？ でも、明日は首に縄をつけてでも、連れていく。今度と言う今度は、詳しく検査しても

らわないと。

前にも同じようなことがあったの？

鐘司
忠子

今日ほどひどくはないけどね。最初は五年ぐらい前だったかな。大抵は会社で残業してる時に起きるんだ。いきなり胸を押さえて、動けなくなるんだよ。

胸？

鐘司
忠子

私は心臓が悪いんだと思う。あんたたちのおじいちゃんも心筋梗塞で亡くなったんだけどね。亡くなる前に何度も発作を起こした。その時とよく似てる

んだよ。

雪也

そんな話、初耳だよ。

忠子

このことは、私とお義姉さんしか知らない。あんたたちには言うなって言われてたんだ。

鐘司

そう言えば、時々、仕事を早退けして、帰ってくるのがあった。お父さんはただの風邪だつて言つてたけど。

雪也

お父さんは働きすぎなんだ。体を壊す前に、もっと人を雇えばよかつたんだよ。

忠子

そんな余裕は、うちの会社にはないよ。毎月月末は綱渡り。今まで潰れなかつたのが不思議なくらいなんだ。

鐘司

どうして僕らには話してくれなかつたんだろう。

忠子

余計な心配をかけたくなかつたんだよ。(鐘司に)でも、あんたのことは楽しみにしてたんだ。鐘司なら、きつとうちの会社を大きくしてくれるって。

そこへ、友枝が義一を支えながらやつてくる。義一が椅子に座る。

鐘司

お父さん。鐘司、急いで帰つてこさせて、悪かつたね。でも、お父さんは大丈夫。顔色もすつかりよくなつたし。

鐘司

よかつた。

雪也

(友枝に)叔母さんに聞いたよ。お父さん、心臓が悪いんだつて？

友枝

それほどひどくはないんだよ。今までだつて、一晚寝れば、治つたし。でも、今日は？叔母さんに支えてもらわなければ、歩けなかつたじゃないか。

義一

騒ぐほどのことじゃない。俺は大丈夫だ。

忠子 義一 忠子 義一 忠子 友枝 義一 友枝 義一 鐘司 義一 鐘司 義一 鐘司 義一 鐘司 義一

いつものお兄さんに戻ったみたいね。でも、いきなり倒れた時はビックリしたのよ。お兄さんにもしものことがあったらどうしようって思っちゃった。心配をかけて、済まなかったな。

水臭いこと言わないでよ。でも、こんな思いは二度としたくない。明日は仕事を休んで、病院へ行ってね。

その必要はない。

強がりと言うのはやめて。お兄さんだって、お父さんが亡くなった時のことは覚えてるでしょう？

（義一に）検査だけでもしてもらった方がいいんじゃないですか？ あなたももういい年なんだし。

しかし。

取り返しがつかなくなっからじゃ、遅いんですよ。あなたにはできるだけ長生きしてもらわないと、私たちが困るんです。

わかった。明日、病院へ行く。

お父さん、ごめんなさい。お父さんの気持ちも知らないで、勝手なことばかりして。

何を今さら。

でも、こうなる前に言ってほしかった。心臓が悪いこと、会社の経営が苦しむこと、僕の助けが必要なこと。

誰がそんなことを言った。おまえなんかいなかったって、うちの会社はやっていけない。

でも、僕は長男だ。長男には、親の仕事を継ぐ責任がある。俺がこうなって、同情したのか。かわいそうだと思っただのか。

鐘司
義一

違う。僕は自分のしていることがただのわがままかもしれないと思ったんだ。それは最初からわかっていたことだ。それでも、おまえはロケットを選んだ。だったら、その決断を最後まで貫き通せ。

鐘司

お父さんを助けなくていいの？

義一

おまえはおまえのやりたいことをやれ。ロケットを作るんだ。

義一・友枝・忠子・雪也が去る。

シリウス
ベテルギウ

全く頑固な親父だな。素直に跡を継いでくれって言えばいいのに。昔の男性はみんなこうでしたよ。息子に自分の弱みを見せたくないんです。

鐘司

(鐘司に)それで、お父さんの検査の結果は？
心筋梗塞でした。すぐに手術をしたんですが、その最中に容態が悪化して、息を引き取りました。

シリウス

亡くなったんですか？ そんな。

鐘司

父は四十八歳でした。会社を潰さないために、死に物狂いで働いて、そのおかげで寿命を縮めたんです。

ベテルギウ

そのかわり、たくさんの人に安くていい家を作った。きっと天国へ行っただと思えますよ。

鐘司

父も天国行きのバスに乗って、ここを通ったんですね？
今頃は天国であなただけを見てますよ。

ベテルギウ
プロキオン

(鐘司に)それで、お父さんの会社はどうなりましたか？
父はやりかけの仕事をたくさん残していました。僕は東京へ出発するまで、

鐘司

叔母の手伝いをするのにしました。

②一九六四年四月昼、会社。忠子がやってくる。

忠子 鐘司、ちよつといいかい？ 今、お客さんがいらっしやっただよ。

鐘司 僕は外に出てようか？

忠子 あんたにも同席してほしい。お客さんていうのは、堀田不動産の社長さんな

んだよ。

鐘司 あんな大きな会社の社長さんが、どうしてうちに？

忠子 折入って相談したいことがあるんだって。私一人じゃ不安だから、あんたも

一緒に話を聞いて。

鐘司 別に構わないけど。

そこへ、堀田兵士郎とゆかりがやってくる。

堀田 突然、お邪魔して、申し訳ない。君が辺見さんの息子さんか。

鐘司 長男の鐘司です。初めまして。

堀田 堀田兵士郎です。君の噂はゆかりからよく聞いている。

鐘司 (ゆかりに) そうか。君は堀田さんの親戚だと言ってたね。

ゆかり 姪です。三月の末から、伯父の秘書をつとめてます。今はまだ見習いですけ

ど。

堀田 ゆかりは見た目もいいが、頭もいい。秘書にして正解だったよ。

ゆかり 社長、私のことより、本題に入ってください。

堀田 わかったわかった。(鐘司に) 普通、秘書というのは社長に気を遣うものだ

ゆかり
堀田

ろう。しかし、ウチは逆なんだ。
社長、怒りますよ。
よしよし、冗談はここまでにしよう。さて、忠子さん。お兄さんが亡くなつて、まだ一月も経たないのに恐縮だが、この会社のこれからのことについて話をしたい。ゆかりの話によると、鐘司君は来月から東京の大学へ行くそうだね。

忠子
堀田

ええ。おかげさまで、東大に合格しまして。
つまり、長男のくせに、父親の跡は継がないわけだ。では、誰が次の社長になるのか。

忠子
堀田

次男の雪也です。でも、雪也はまだ高校生なので、卒業するまでは私が。
女の社長とは珍しい。しかし、建設業は男の世界だ。はたしてうまくやっていけますかな？

忠子
堀田

兄のやり方を受け継いでいけば、何とかなるのではないかと。
辺見さんは安くていい家をたくさん作ってきた。自分の会社の儲けは度外視して。おかげで、経営状態はいつもギリギリ。そうだな、ゆかり？

ゆかり

辺見さんご本人がしばしばそのようなことを口にしたようです。知り合いの方々がそう証言しています。

堀田
忠子

（忠子に）実際のところはどうかなんです。
ギリギリなのは事実です。でも、借入金金の返済が遅れたことは一度もありません。

堀田
鐘司

それは辺見さんが方々に頭を下げて、金を融通してもらったからだ。しかし、辺見さんが亡くなった今、その手が通用するかどうか。
堀田さんは叔母にどうしろと仰りたいんですか？

堀田 鐘司 堀田 鐘司 堀田 鐘司 堀田 鐘司 堀田 鐘司 堀田 鐘司 堀田 鐘司 堀田 鐘司

はつきり言いましょう。辺見工務店を私に譲っていただけたい。それはつまり、堀田さんが社長になると言うことですか？

私は長年、不動産業で飯を食ってきたが、そろそろ他の業種にも手を広げた。建設業はその手始めというわけです。

だったら、自分で会社を作ればいいのに。

辺見工務店はいい会社だ。私が経営すれば、きっと大きくなる。十年以内に、長野一にしてみせます。名前は堀田工務店に変えますが。

堀田さん、この話はお断りします。

叔母さん、いきなり断るなんて、失礼だよ。

鐘司、あんたはわかってない。この人が言ってることはすべて奇麗事。本当はうちの会社が目障りなんだよ。

目障りって？

この人は笛田市内にたくさんの賃貸住宅を持つてる。その住人が家を買って、出ていったら？ 当然、空き家になるだろう？ この人から見れば、うちの会社は商売敵なんだよ。

大袈裟なことを言っただけは困る。店子の一人や二人、出ていったところで、私は痛くも痒くもない。

だったら、どうして兄の邪魔をしたんです。一度契約が決まった土地を横取りしたり、欠陥住宅だって風評を流したり。あなたが裏から手を回したことはわかっているんですよ。

不当な言いがかりだ。名誉棄損で訴えるぞ。

お好きにどうぞ。とにかく、うちの会社はあなたには譲りません。そんなことをしたら、天国の兄に怒られるに決まってる。

堀田

断るなら、それでもいい。しかし、あんたが社長になったら、先は見えてるぞ。

忠子

ご心配なく。社長にはここにいる鐘司がなりますから。

鐘司

僕が？

忠子

鐘司、私を助けて。うちの会社の社長になって。

鐘司

でも、僕は東京へ行くんだ。

忠子

雪也が高校を卒業するまででいい。それまで、お兄さんが作った会社を守って。

忠子・堀田・ゆかりが去る。

ベテルギウ
鐘司

（鐘司に）それで、あなたは社長の座を引き受けたんですか？

もちろん、その場は断ったんですが、それから毎日叔母が家へやってきて、頼む頼むと頭を下げるんです。一週間後、僕は渋々、ウンと言いました。

シリウス
鐘司

それじゃ、東大は諦めたんですか？
一年間、休学することになりました。弟の雪也はその時、三年生だったので、僕が社長をやるのは一年だけだと思っただけです。

シリウス
鐘司

思った？ ということは、一年じゃ済まなかったんですか？

実際に仕事を始めてみて、建設会社を経営することがどんなに大変か、よくわかったんです。建築の知識より、経営の知識の方がはるかに重要だった。僕でさえ頭がパンクしそうな仕事で、雪也にできるとは思えない。

ベテルギウ
シリウス

あなたと違って、頭の出来が悪そうですね。

鐘司

僕は雪也に言いました。大学へ行って、経営を学んでこい。おまえが卒業するまで、会社は俺が何とかすると。

プロキオン
ベテルギウ

（鐘司に）でも、休学して、五年もできるんですか？
最長で一年までしか認められません。

鐘司
シリウス

それじゃ、退学したんですか？ せっかく二浪して、受かったのに。

鐘司

受験に年齢制限はない。僕は五年後にもう一度受けることにしました。一年後、雪也は東京の私立大学に合格して、家を出ていきました。そして、四年後の一九六九年の一月。

プロキオン

雪也さんが帰って来たんですか？

①一九六九年一月夕、辺見宅。友枝がやってくる。紙袋を持っている。

友枝

鐘司、雪也が帰ってきたよ。これ、東京のお土産だって。

鐘司

バカなやつだな。実家へ帰るのに、気を遣うことなんか無いのに。

友枝

違うんだよ。このお土産は、雪也の連れの人が私たちについて。

鐘司

連れの人が？

友枝

それがなんとまあ、雪也の彼女だってさ。ビックリするじゃないか。

そこへ、雪也・榎本洋代がやってくる。

雪也

ただいま、お兄さん。

鐘司

雪也、俺はおまえに経営の勉強をしてこいって言ったんだ。彼女を見つけて

雪也

こいとは言っていない。

洋代

勉強はしっかりやったよ。成績だって、ほとんど優だった。神様はそんな僕の姿を空の上から見てたんだろうな。それで、ご褒美をくれたんだ。

雪也

ご褒美って、私のこと？

洋代

そうだよ。僕は幸せ者だ。だって、洋代みたいな素敵な女性と出会えたんだから。

洋代 鐘司 雪也 洋代 友枝 雪也 友枝 洋代 友枝 鐘司 洋代 雪也 鐘司 洋代 友枝 雪也 友枝 洋代 友枝 鐘司 洋代 雪也 鐘司 洋代

私も幸せよ、雪也。

(雪也に) お取り込み中に申し訳ないが、彼女を紹介してくれないか。ごめんごめん。彼女は僕と同じ大学で、文学部四年生の樫本洋代さん。

(鐘司に) 初めまして。お兄さんの鐘司さんですよ。お噂は雪也君から聞いてます。東大を蹴って、お父さんの会社を継がれたんだそうですね。

仕方なくだよ。僕は長男だから。

わかりません。私も長女ですから。

洋代さんのお父さんはどんなお仕事なさってるの？

東京で、計算機の会社を経営しています。

あら、あなたのお父さんも社長さん？

うちの会社とは桁が違うよ。社員が百人以上いて、本社とは別に、工場もあるんだ。

(友枝に) 来年、長野に新しい工場を作る予定です。会社の規模がどんどん大きくなるので、父は大忙しなんです。でも、雪也君が手伝ってくれば、少しは楽になるんじゃないかな。

洋代、その話はまた後にしよう。

ごめんなさい。私ったら、つい口を滑らせちゃって。

一体何の話だい？

どうせだから、言っちゃいますね。私たち、婚約したんです。そうよね、雪也？

参ったな。お母さんたちには僕から話をするつもりだったのに。なんてことだい。あんた、彼女じゃなくて、お嫁さんを連れてきたのかい？

そこへ、忠子がやってくる。

忠子

雪也、久しぶりだね。あら、そちらの方は？

友枝

忠子さん、よく聞いて。この人は雪也のお嫁さんになる人なんだよ。

忠子

お嫁さんだつて？ 雪也、あんたつて子は暗算も駆け足も遅いの、こうい

雪也

うことだけ速いんだね。

洋代

やめてくれよ、叔母さん。

忠子

(忠子に)初めまして、樫本洋代です。

忠子

雪也の叔母の忠子です。二人の馴れ初めを教えてよ。お義姉さん、お茶をお

願ひ。

友枝・忠子・洋代が去る。

雪也

お兄さん、結婚の話はまだ本決まりじゃないんだ。本当だよ。

鐘司

でも、おまえは彼女と一緒にいたいんだろう？

雪也

うん。でも、彼女は一人娘だね。お義父さんからは、婿になって、会社を継

鐘司

ぐなら、結婚を認めるって言われてるんだ。

鐘司

樫本計算機か。俺も聞いたことがあるぐらいだから、さぞかし大きな会社な

雪也

んだらうな。

鐘司

お兄さん、お兄さんが反対するのなら、僕は――

鐘司

反対なんかするわけないだろう。おまえと洋代さんは愛し合ってる。だった

鐘司

ら、一緒になるべきだ。でも、これだけは覚悟しろよ。おまえには彼女を幸

鐘司

せにする責任が生じるんだ。

雪也 ありがとう、お兄さん。

雪也が去る。

シリウス 雪也、おまえ、勝手すぎないか？（鐘司に）あなたもあなたですよ。実の弟

鐘司 五年前のことを思い出したんですよ。僕は東大に入れなかった。あの時感じ

た苦しみは、今でも忘れられません。僕はあの苦しみを、雪也に味わわせた

ベテルギウ 鐘司 でも、あなたの夢は？
こう思つて、諦めることにしました。ロケットは僕以外の人間にも作れる。

ベテルギウ 鐘司 でも、辺見工務店の社長は僕にしかできない。

鐘司 いいえ。でも、雪也と洋代さんはその年の七月に結婚式を挙げました。新婚

シリウス 旅行はアメリカ一周。途中で、フロリダにある、ケネディ宇宙センターにも

鐘司 行きました。何をしに行つたか、わかりますか？
ロケットの打ち上げでも見に行つたんですか？

プロキオン た、アポロ十一号の打ち上げです。世界で初めて月面に着陸し

アポロ十一号の打ち上げは、一九六九年の七月ですね。

② 一九六九年七月夕、辺見宅。友枝がやってくる。

友 鐘 友 鐘 友 鐘 友 鐘 友 鐘 友 鐘 友 鐘 友 鐘 友 鐘
枝 司 枝 司 枝 司 枝 司 枝 司 枝 司 枝 司 枝 司

鐘司、アポロ十一号のニュースが始まったよ。見なくていいのかい？

僕もいいよ。でも、人類が初めて月の上に立つんだよ。せっかくだから、見ておいた方がいいんじゃないの？

お母さん、アームストロング船長が月面に立ったのは、日本時間の午前十一時五十六分。今から六時間も前の話だよ。

わかっているよ。私は生中継を見たんだから。でも、おまえは見てないだろう？明日、新聞を読むからいいよ。じゃ、僕はちよつと出かけてくる。

どこへ行くの？

散歩だよ。夕食までには戻ってくるから。

それなら、ちよつと寄ってほしい所があるんだけど。

どこだい？

碧さんの家。この前、駅前を歩いていたら、ぼったり会ってね。「鐘司さんはお元気ですか？」って聞かれたんだ。だから、顔を見せに行つて。

そんなことのためにわざわざ？

あの子はおまえに会いたがってるんだよ。おまえのことが好きなんだ。

それはお母さんの思い過ぎだよ。

鐘司、碧さんはまじめない子だよ。あの子を知ってる人はみんな褒める。

お見合ひの話だつて、腐るほど来てるはずだ。ボーッとしてたら、他の男に取られちゃうよ。それでもいいのかい？

お母さん、僕はまだ結婚する気はないよ。

そのセリフは去年も一昨年も聞いたよ。結婚は大学を卒業してから考えるつて言つてたよね？

でも、今は？

大学へ行かないなら、そろそろ考え始め

鐘司　　でもないんじゃないかい？
友枝　　そんなこと、急に言われても。
友枝　　おまえ、碧さんのことはどう思ってるんだい。
鐘司　　僕もまじめない子だと思ってるよ。
友枝　　だったら、迷うことはないか。
鐘司　　この話はおしまいにしよう。散歩に行ってくるよ。
友枝　　鐘司、私はおまえに幸せになっただけだよ。今まで散々苦労してきたんだから。
鐘司　　ありがたい、お母さん。

友枝が去る。

鐘司　　僕は家を出ると、三隈川に沿って、歩き始めました。ふと気づいてみると、碧君の家の前まで来ていました。

③ 一九六九年七月夜、路上。碧がやってくる。

碧　　こんばんは。お久しぶりです、辺見さん。
鐘司　　ここで僕を待ってたの？
碧　　辺見さんのお母さんから電話があったんです。私に会いに来るって。
鐘司　　余計なことを。僕は母に命令されたんだ。君にこの顔を見せに行けって。
碧　　そうですか。じゃ、じっくり見させてもらいます。
鐘司　　もういいかい？

鐘司 碧
鐘司 碧
鐘司 碧

まあだだよ。
こんな顔、一秒見れば、十分だろう？
辺見さん、少し痩せましたね。顔色もよくない。それに何だか寂しそう。
それは君の思い過ぎだよ。じゃ、僕はもう行くから。
あつ、秀ちゃん！

そこへ、長門がやってくる。

長門

ごめんな、遅くなっちゃって。あれ？　そこにいるのは鐘司じゃないか。おまえ、ここで何してるんだ？

散歩だよ。長門は？

碧と二人でボーリングに行くんだ。

おまえら、付き合ってたのか？

付き合ってたません！　でも、秀ちゃんに無理やり誘われて。

碧が一度もやったことがないって言うから、俺が教えてやろうと思ってな。

俺、こう見えても、巧いんだぜ。目標は中山律子。

男なら、矢島純一か安武民祐を目指せよ。

いいじゃないか、好きなんだから。

じゃ、二人で楽しんできてくれ。

いいのか？　碧を連れていっても。

なぜそんなことを聞くんだ？

だって、俺たちはこれから二人で出かけるんだぞ。これはいわゆるデートつてやつだぞ。

鐘司 長門
鐘司 長門
鐘司 長門
鐘司 長門

鐘司
長門

碧

鐘司
長門

長門

鐘司
長門

長門

長門が去る。

言われなくても、わかってるよ。楽しいデザートになることを祈ってる。
ダメだ、碧。こいつ、全然焼き餅を焼かない。

もういい。秀ちゃんは帰って。

え？ デートに行くんじゃないのか？

鈍いやつだな。おまえは俺たちが二人で出かけるって聞いたたら、反対するべきだったんだ。笑顔で送り出すなんて、最悪の選択だ。

長門、俺には何が何だか、さっぱりわからない。

だったたら、碧に説明してもらえ。俺は帰る。

鐘司

碧

鐘司

碧

鐘司

碧

鐘司

碧

鐘司

鐘司
碧

碧君、これは一体……。

私は辺見さんが好きです。辺見さんは私が好きですか？

好きだよ。ずっと好きだった。でも、今の僕は君に会うのが辛い。僕は君に

嘘をついたから。

嘘って？

五年前に言っただろう？ いつかは僕も、自分が作ったロケットを月まで飛ばしたかって。でも、今の僕はどうか？ 大学へ行くのを諦めて、父親の跡

を継いだ。ロケットのかわりに、家を作ってる。

家を作るのも、立派な仕事だと思えます。

そんなことはわかかってる。でも、僕が作りたかったのは家じゃない。

だったたら、ロケットに負けない家を作ってください。そこに住む人たちが、

アームストロング船長より幸せになれるような、そんな家を。

鐘司

碧

鐘司

碧

鐘司

碧

ロケットに負けない家？
辺見さんなら、きつと作れます。

わかった。そのかわり、君も協力してほしい。

協力って？
僕と結婚してほしい。この通りだ。（頭を下げる）
辺見さん、私はその言葉を五年も待ってたんですよ。

碧が鐘司の手を握る。

ベテルギウ

鐘司

シリウス

鐘司

プロキオン

鐘司

ベテルギウ

鐘司

シリウス

ベテルギウ

シリウス

ベテルギウ

（拍手して）おめでとうございませ、辺見さん！
 ありがとうございます。でも、僕が碧にプロポーズしたのは、十三年も前の話なんで、今さらおめでとうって言われても。
 念のために聞いておきますけど、碧さんのお父さんは社長じゃなかったんでしょね？
 普通の会社員で、碧はその次女でした。当時は市立図書館で司書をしていました。結婚式はどちらで？
 市内の神社で。
 神社？ あなた、天使を三人も前にして、よく神社なんて言えましたね。いや、僕は別に神道の信者ってわけじゃないんですが、当時は神社で神主さんに祝詞をあげてもらって、その後、自宅で宴会をするのが一般的で。所長、許してあげましょう。私たちだって、地上にいた頃は、神社にお参りしていたじゃないですか。
 私はしてません。私の父は寺の住職でしたから。
 お坊さんの娘が天使になっていいんですか？
 生きている間に善行を積めば、お坊さんの娘だろうが、お坊さん本人だろうが、天使になれるんです。

プロキオン

鐘司

（鐘司に）それで、新婚旅行はどちらへ？
式を挙げたのが翌年の三月で、ちょうど大阪万博が開催した直後だったんで
す。それで、二人で大阪へ。

プロキオン

大阪万国博覧会、エキスポ七〇の開催は、一九七〇年の三月ですね。

①一九七〇年三月朝、笛田駅。碧・友枝・雪也・洋代・川地がやってくる。

川地

鐘司

川地

それでは、辺見鐘司君と碧さんの前途を祝福して、バンザーイ！バンザーイ！
川地さん、もうそれぐらいで結構です。
そうか？ 私としては、君たちを乗せた列車が見えなくなるまでやりたいん
だがな。

お兄さん、アメリカ館には行くんだらう？

（鐘司に）やつぱり、月の石は見なきや。あと、アポロの月着陸船も。

でも、五時間も並ばなきゃいけないらしいんだ。

その間は、お義姉さんとおしゃべりしてればいいじゃないか。五時間ぐらい、
あつという間だよ。

私たちも新婚旅行の時、フロリダの海岸へ日の出を見に行つて、結局、日の
入りまで見ちゃったよね。

金婚式を迎えたら、またあそこへ行こう。

そんなに待てない。今年行きたい。そうだ、毎年行こうよ。

そういう話は二人だけの時にして、お兄さんの出発を祝いたまえ。

碧さん、鐘司をお願いしますね。

はい、お義母さん。

雪也
洋代
川地
友枝
碧

洋代 万博会場では、迷子にならないように、手を握っての方がいいですよ。
碧 はい、そうします。(鐘司の手を握る)
友枝 その手を絶対に離すんじゃないよ、鐘司。
鐘司 わかった。

そこへ、忠子がやってくる。

忠子 鐘司、ちょっと話があるんだよ。
鐘司 何か急用？

忠子 昨夜からの雨で、三隈川の水位が上がっちゃって。砂尻の辺りで、水が溢れ
たらしいんだ。

友枝 あそこは川幅が狭いからね。私が子供の頃も、溢れたんだよ。

忠子 (鐘司に) 砂尻には、新築中の家が三軒もある。下手をしたら、大損害だよ。
鐘司 それだけじゃないよ。あそこには、僕が社長になってから売った家が何軒も

忠子 ある。小川さんの家、奥村さんの家、黛さんの家……。

鐘司 どうする、鐘司？

碧、僕は砂尻へ行く。君は家で待っていてくれ。

鐘司 はい。

② 碧・友枝・忠子・雪也・洋代・川地が去る。
昼、堀田不動産。堀田・ゆかりがやってくる。

ゆかり 辺見先輩、お待たせしました。

堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田 堀田
鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司 鐘司
ゆかり

（鐘司に）私に話というのは何だね。

今朝の六時頃、三隈川が氾濫を起こして、砂尻の一带が洪水になっている。こ
とはご存じですか？

もちろん知ってる。うちの会社の物件もいくつかあるんで、今はその対応に
てんでこ舞いだ。

砂尻の住民は近くの小学校と中学校に避難しました。でも、人数が多すぎて、
すし詰めの状態になっています。あそこは近年、転入者が急増して、避難所

の整備が追いついてなかつたんです。

市役所は早急に手を打つべきだな。よし、私から市長に電話しよう。

砂尻の隣の秋葉に、堀田不動産が経営しているビジネスホテルがありますよ

ね？ 名前は確か……。

堀田第一ホテルです。

（堀田に）そのホテルの空き部屋を避難者に開放してもらえませんか？

タダで泊めると言うのか？ 無茶なことを言うな。

困った時はお互い様です。

避難者の救済は行政の仕事だ。民間企業が行政の肩代わりをする義務はない。

避難者の中には、堀田不動産の賃貸住宅に住んでいる人もいるんじゃないで

すか？

それはもちろんいるだろう。しかし、うちの会社に避難所を提供する義務は

ない。

僕は義務の話をしてるんじゃない。人助けの話をしてるんです。

これが市長からの要請だったら、まだ検討の余地はある。市が宿泊料を補償
してくる可能性があるからな。しかし、君が補償してくれるとは思えない。

鐘司 だから、頼んでいるんです。堀田さん、お願いします。（頭を下げる）
堀田 鐘司君、君には会社の経営というものがまるでわかっていないようだ。

鐘司 どういうことですか。

堀田 社長には会社を維持して、社員の生活を守る責任がある。一時の感情に押し流されて、会社を傾かせるわけには行かないんだ。

鐘司 これぐらいのことで、堀田不動産が傾きますか？

堀田 話は終わりだ。私は仕事に戻る。

鐘司 堀田さん、待ってください！

堀田が去る。

ゆかり 辺見先輩、社長は一度決めたことは絶対に変えません。これ以上、話をして
も、無駄ですよ。

鐘司 わからない。自分の町の人間が困ってるのに、なぜ助けようとしらないんだ。

ゆかり そんなの、一銭も儲からないからに決まってるじゃないですか。

鐘司 会社は金儲けの道具じゃない。

ゆかり 怒るのはわかるけど、ここは頭を切り換えて、次にできることをやった方が
いいですよ。

鐘司 その通りだ。ありがとう、ゆかり君。

ゆかりが去る。

シリウス それで、次は何をしたんです。

鐘司

秋葉を走り回って、避難所になりそうな建物を探しました。そうしたら、食
会社の倉庫が見つかって、本社に電話してみたら、今は使っていないので、中
は空だって言うんです。すぐに本社へ乗り込んで、夕ダで貸してくれと頼み
ました。

ベテルギウ

今度はウンと言ってもらえたか？

鐘司

その社長が僕の父のことを知っていて、辺見さんの息子さんに頼まれたら、

ベテルギウ

いやとは言えないって。

鐘司

それはきつと、天国のお父さんのお導きですよ。

プロキオン

それから家族ごとの配置を決めて、夕食を配って、みんなで倉庫を掃除

鐘司

一体何時まで働いたんです。

鐘司

時間なんか気にしている余裕はなかった。夕食の後片付けをしていると、川

地さんと長門がやってきました。

③夜、倉庫の前。川地・長門がやってくる。

長門

鐘司、いつまで碧を待たせるつもりだ？

鐘司

(腕時計を見て)しまった。十一時を過ぎてる。

川地

終電車はとつくに出た。今日は出発は無理だ。

長門

(鐘司に)本当だったら、今頃は大阪のホテルについて、最上階のバーでカ

クテルを飲みながら、「子供は二人ほしいね」「ううん、三人よ」とか言っ
て、新婚旅行を満喫していたはずだ。それなのに、碧は丸一日、自宅待機。
かわいそうだと思わないのか？

鐘司　でも、俺には家を売った人間としての責任があったから。
長門　俺は責任の話をしてるんじゃない。夫婦の愛情の話をしてるんだ。
川地　（鐘司に）今すぐ家へ帰れ。帰って、碧さんに謝るんだ。
長門　（鐘司に）謝っても、許してもらえるかどうかはわからないがな。
鐘司　碧はきつとわかってくれる。
長門　あいつはああ見えて、気位が高いんだ。下手したら、離婚で話になるかもな。
鐘司　家に帰ると、玄関の前で、母と叔母と弟夫婦が待っていました。

④ 辺見宅の前。友枝・忠子・雪也・洋代がやってくる。

洋代　お帰りなさい、お義兄さん！
鐘司　みんな、こんな所で何をしてるんだ？
雪也　お兄さんの帰りを待ってたんだよ。今日は一日、秋葉を駆け回ってたんだろ
忠子　う？　本当にお疲れ様でした。
鐘司　（鐘司に）新築中の家は三軒とも無事だよ。大工さんたちが守ってくれた。
友枝　碧は？
長門　家の中にいる。おまえに話があるってさ。
川地　（鐘司に）ほら、俺の予想通りだ。
友枝　（鐘司に）まず最初に謝るんだ。碧さんが離婚話を切り出す前に。
鐘司　（鐘司に）さあ、入って。
友枝　お母さんは？
雪也　私は今夜は忠子さんの所に泊まる。
（鐘司に）僕と洋代は駅前のホテルに行くよ。

忠子
洋代
鐘司

(鐘司に)今夜は碧さんと二人だけで、じっくり話をするんだよ。
(鐘司に)お義兄さん、頑張ってる!
みんなの声援を背に受けて、僕は家の中に入りました。

辺見宅。碧がやってくる。テーブルの上に、食事の支度がしてある。

碧

お帰りなさい、鐘司さん。

鐘司

これは?

碧

お腹を空かせて帰ってくると思って、夕食の支度をしておきました。さあ、座って座って。

鐘司

碧、今日は済まなかった!君のことを忘れていたわけじゃないんだ。ただ、

次から次へとやらなければいけないことが出てきて。それを必死でやってるうちに時間が過ぎて。

碧

わかってる。あなたと駅で別れた時、出発は明日に延期だなんて思った。

鐘司

それがそうじゃないんだ。僕は新婚旅行のために用意していた金を全部使ってしまった。毛布や布団や食料を買って。僕らは大阪へは行けない。新婚旅行は中止なんだ。

碧

(笑う)

中止じゃなくて、延期にしましょう。一生懸命働いて、貯金が貯まったら、行けばいい。その時はもう新婚じゃないかもしれないけど。

鐘司

怒らないのか?実家には帰らないのか?バカね。私はここであなたと暮らすって決めたの。

鐘司　　そうか。みんなで俺を騙したんだな？　バカヤロウ！

川地がギターを弾く。友枝・忠子・雪也・洋代・川地・長門が歌う。

六人　　「見上げてごらん夜の星を／小さな星の小さな光が／ささやかな幸せをうた
つてる」

プロキオン・シリウス・ベテルギウスも歌う。

九人　　「見上げてごらん夜の星を／ボクらのように名もない星が／ささやかな幸せ
を祈ってる」

鐘司・碧がワインで乾杯する。

ベテルギウ

鐘司

シリウス

鐘司

プロキオン

鐘司

ベテルギウ

鐘司

ベテルギウ

鐘司

ベテルギウ

鐘司

ベテルギウ

鐘司

ベテルギウ

鐘司

シリウス

（鐘司に）いい奥さんもらいましたね。

ええ、僕なんかにはもったいないぐらいです。

だったら、旅行にはすぐに連れて行ってあげたんでしょね？

そうしたいのは山々だったんですが、仕事が忙しくて。それに、結婚してす

ぐに、子供ができてしまいましたね。

男の子ですか？ 女の子ですか？

女の子です。名前は鈴花にしました。

鈴花ですって？ あなたたって人はなんてすばらしい人なんでしょう。あなた

に奥さんがいなかったら、キスしたいぐらいです。

どういうことでしょう？

鈴っていうのは、天使にとって特別なものなんです。二級天使が一級に昇格

する時、神様はその天使に羽をお与えになります。そして、お祝いの印に地

上の鈴を一つ鳴らすんです。

本当ですか？ じゃ、猫が首につけた鈴をリンリンリンで鳴らしたら。

それは、三人の天使が羽を手に入れたという意味なんです。鈴花、実がいい

名前です。きつといい子に育つでしょう。

そうですね？ 今、ちょうど十歳ですが、生意気で困ってますよ。

それで、旅行にはいつ行ったんです。

鐘司 それがいまだに……。

シリウス 行っていないんですか？ 結婚してから十三年も経つのに？

鐘司 だから、仕事が忙しかったんですよ。砂尻の洪水以来、辺見工務店の名前は有名になりました。仕事の数はどんどん増えていきました。当然、土日も出勤です。

シリウス それだけ働けば、貯金は十分に貯まったでしょう。

鐘司 普通の会社ならそうでしょう。でも、うちの会社のモットーは、いい家をよ

り安くです。経営はいつまで経ってもギリギリでした。

ペテルギウ お父さんのやり方を守ったんですね。

鐘司 辺見工務店は父が作った会社ですから。でも、ついに絶体絶命の時が来た。

それが今日だったんです。

プロキオン 今日は一九八三年の十二月二十四日、クリスマスイブです。

①一九八三年十二月二十四日昼、会社。長門がやってくる。

長門 鐘司、これ、契約書と頭金の五百万だ。(封筒を差し出す)

鐘司 (受け取って) オーケイ。一応、中身を確認させてもらうぞ。

長門 おまえにはいくら札を言っても足りない。俺が家を持てたのは、おまえのおかげだ。

鐘司 何を言ってるんだ。俺は定価である家を買った。おまえが友達だからって、

一切値引きしなかった。

長門 それでも、他の会社に比べれば、ずっと安い。これでよく儲けが出るな。

鐘司 逆だよ。他の会社が儲けすぎなんだ。

長門

いや、値段の話だけじゃない。そもそも今の会社に就職できたのだから、おまえがウチの社長に頭を下げてくれたからだし。

鐘司

そんなの、十年も前の話じゃないか。

長門

俺は気が短いから、どうしても一つの所で長続きしない。でも、今度クビになつたら、おまえを裏切ることになる。そう思つて、必死で働いたんだ。

鐘司

今日まで働いてきたのはおまえだし、家を買うだけの金を稼いだのもおまえだ。もつと誇りを持てよ。

長門

そうだな。俺は今日から一国一城の主になるんだもんな。

鐘司

電話だ。ちよつと待つてくれ。

鐘司

はい、辺見工務店です。

雪也

お兄さん、僕だよ。

鐘司

雪也か。どうした、こんな時間に。仕事中心じゃないのか？

雪也

今、会社。実は今年の正月はそっちへ行けなくなつたんだ。社長のお供でモスクワへ出張することになつて。

鐘司

モスクワか。いいなあ。ガガーリンはモスクワの西のグジャーツクの生まれなんだ。時間があつたら、行つてみるよ。

鐘司

そんな暇、あるわけないだろう？ 僕は仕事で行くんだから。

雪也

重役になつても、楽はできないな。

鐘司

そういうこと。じゃ、お義姉さんによろしく。

鐘司が受話器を置く。雪也が去る。

長門

雪也君、モスクワへ行くのか？

鐘司

そうだよ。あいつも今や樫本計算機の専務取締役だ。一年中世界を飛び回っている。去年、ハワイに別荘を買ったそうさ。

長門

大したご身分だな。おまえだって、お父さんの跡を継がずに、東大へ行って

鐘司

でも、俺は跡を継いだ。後悔はしてないよ。オーケイ。契約書も頭金も問題なし。これであの家はおまえのものだ。

そこへ、忠子・二谷がやってくる。

忠子

鐘司、ちよつといい？ お客様がいらつしやっただよ。

長門

(鐘司に) それじゃ、俺は帰るよ。そのうち、暇ができたら、家に遊びに来てくれ。女房の料理をご馳走するから。

鐘司

ミエさん、料理はうまくなったのか？
近頃、ようやく人間が食えるものになってきた。楽しみにしててくれ。

長門

長門が去る。

鐘司

(二谷に) お待たせしました。

忠子

こちらは笛田税務署の二谷さん。

鐘司

(二谷に) 初めまして、社長の辺見鐘司です。うちの会社が税務調査を受け

二谷

鐘司

二谷

忠子

二谷

鐘司

二谷

忠子

二谷が去る。

るのは、今回が初めてなんですよ。どうか、お手柔らかにお願いします。私は今年一年の御社のお金の出入りを確認するだけです。不審な点が何もなければ、調査は一日で終わります。

それでしたら、ご安心を。僕は疚しいことは何もしていません。御社は最近十年の間に、事業規模を飛躍的に拡大させていますね。それなのに、純利益は一向に伸びない。常に倒産一步手前の状態だ。

うちの会社は、いい家をより安くがモットーなんです。だから、会社が大きくなっても、儲けは全然増えなくて。

そう言っても、増えた分の収入を、自分のポケットに入れる経営者はたくさんいます。

僕は違いますよ。もちろん、そうでしょうとも。それでは早速、調査を始めさせていただきます。

こちらへどうぞ。帳簿などの書類は隣の部屋に用意してあります。

忠子

鐘司

忠子

鐘司

全く、失礼な男だね。頭から疑ってかかっているよ。

それがあの人の仕事だからね。でも、帳簿を見れば、きつとわかってくれる。これ、長門の家の契約書と頭金。(封筒を差し出す)

(受け取って) 五百万だね? すぐに銀行に入金してくるよ。(よろめいて、うづくまる)

どうしたの?

忠子

ちよつと目眩がして。昨日から風邪気味なんだよ。

鐘司

無理しないで、帰ったら？

忠子

税務調査の最中に早退けするわけには行かないよ。もう大丈夫。落ち着いた。

鐘司

じゃ、僕はちよつと出かけてくる。堀田さんに呼び出されちゃって。

忠子

また何か企んでるのかね？ おかしなことを言ってきたら、ガツンと言いつ返してやりな。

鐘司

そんなことできるわけないだろう。向こうは大会社の社長だよ。

忠子が去る。

② 堀田の会社。堀田がやってくる。

堀田

よく来たな、鐘司君。忙しいところを呼びつけて、済まなかつた。

鐘司

忙しいのは堀田さんの方でしょう。次の市長選挙に出馬すると聞きました。

堀田

それは根も葉もない噂だ。私は政治には興味がないよ。君の方こそ、近い将来、どうだね。君なら市長の仕事は立派につとまるだろう。

そこへ、ゆかりがやってくる。カップを二つ持っている。

ゆかり

いらつしやいませ、辺見先輩。

鐘司

久しぶりだね、ゆかり君。旦那さんは元気？

ゆかり

知りません。半年前に別れたんで。

鐘司

また？ あ、ごめん。

堀田

全く、ゆかりにも困ったものだ。今度の男ならこのじゃじゃ馬を乗りこなせ

堀田 ゆかり

堀田 鐘司

堀田 鐘司

堀田

堀田 鐘司

堀田

堀田 鐘司

堀田 鐘司

堀田 鐘司

堀田 鐘司

ると思っただが、またしても撥ね飛ばされてしまった。悪いのは私だけじゃありません。

もちろんそうだ。しかし、おまえの相手をするには、よほどの包容力がないと。そう、たとえば、鐘司君のような。

僕には包容力なんてありませんよ。それで、今日のご用件は？

君が秋葉に建てた分譲住宅、大成功だったようだな。

秋葉ハイツですね。おかげさまで、十二戸が完売しました。今はそのすぐ近くに、杏が丘ハイツというのを作っています。こっちは十三戸の予定です。次から次へと大したものだ。今や、辺見工務店は笛田の町を代表する建設会社

社に成長したな。

それほどではありません。うちは一戸建てばかりで、大きな建物はやりませんし、価格も低く抑えています。

しかし、お父さんの頃と比べれば、倍以上の大きさになった。君には経営の才能がある。このまま建設会社の社長で終わるのは惜しい。

だから、市長になれと仰ったんですか？

それは将来の話だ。今、君に頼みたいのは、別のこと。私の右腕になってほしい。

右腕というのは？

堀田不動産の経営に加わってほしいんだ。ポストは事業部長。君の今の月給はいくらだ。百万ぐらいかね？

その半分以下です。

なんと少ない。だったら、百万出そう。業務は新規事業の開発。うちの会社は長野県下に様々な物件を持っている。それを自由に使っている。

堀 鐘
田 司

僕の自由に？
分譲住宅でもマンションでも、好きなものを作りたまえ。ただし、今までとは規模が違うぞ。君の手で一つの町を作るんだ。

堀 鐘
田 司

僕の手で町を？

堀 鐘
田 司

どうだ。うんと言ってくれるかね。

堀 鐘
田 司

夢のような話です。でも、その町に作る家の値段は？

堀 鐘
田 司

会社には格というものがある。天下の堀田不動産が安売りをするわけには行

堀 鐘
田 司

かない。

堀 鐘
田 司

儲からなければダメですか。

堀 鐘
田 司

私には社員の生活を守る責任がある。

堀 鐘
田 司

その言葉は前にも聞きました。僕も社長ですから、当然、社員のことは考えています。でも、それ以外の人のことを考えないわけには行かないんですよ。

堀 鐘
田 司

それ以外の人は？

堀 鐘
田 司

お客さんです。自分の家がほしいと思っっている人たちです。

堀 鐘
田 司

君という男は、まだそんな甘いことを言うのか。資本主義は弱肉強食だ。利益を挙げない会社はすぐに淘汰されるんだ。

堀 鐘
田 司

僕はそうは思いません。辺見工務店は絶対に潰しません。

堀 鐘
田 司

よく考えろ、鐘司君。君の会社は確かに大きくなった。しかし、経営は相変

堀 鐘
田 司

わらず火の車。君の月給も上がらない。そんな生活をいつまで続けるつもり

堀 鐘
田 司

だ。

堀 鐘
田 司

できるところまで。失礼します。

堀 鐘
田 司

鐘司

鐘 司

鐘司が去る。

鐘司が去る。

ゆかり
堀田
ゆかり
堀田

ほらね。だから、無駄だって言ったでしょう？
月給百万を蹴るとは、バカな男だ。二十歳の頃から全く成長していない。
それが辺見先輩の凄いところなんです。いつまでも変わらないところが。
世の中はそんなに甘くない。今に思い知らせる。

堀田・ゆかりが去る。

鐘司がやってくる。

シリウス

辺見さん、本当のことを言ってください。月給百万と言われた時、ちょっと心が動いたでしょう？

鐘司

ええ、実は。それだけの収入があれば、妻と娘を好きな所へ連れて行けますからね。

シリウス

弟さんのように、ハワイに別荘が買えるかもしれない。

鐘司

そんなものはほしくありませんよ。僕が今、一番行きたい所は、デイズニーランドなんです。

ベテルギウ
プロキオン

今年の四月に、東京にできたやつです。ね？
所長、あそこは正確には千葉県です。

鐘司

娘の鈴花が行きたいって言うてるんですよ。時間も金もないので、そのうちそのうちってごまかしてるんですが。

シリウス

堀田さんの会社に入れれば、いつでも行けたのに。

ベテルギウ
鐘司

船長が自分の船から逃げ出すわけには行きませぬよ。ね。
それから一時間後、叔母の忠子は長門から受け取った五百万を持って、銀行へ行きました。

①一九八三年十二月二十四日昼、銀行。忠子・川地がやってくる。椅子に座る。

川地 (パンフレットを見ながら) ほう、これが今、工事中の分譲住宅ですか。
忠子 杏が丘ハイツです。中の地図を見てください。その場所に見覚えはないですか？

川地 秋葉の真ん中ですね。そうか、わかった。洪水の時の避難所があった場所だ。そうです。あそこは食品会社の倉庫だったんですが、建物が古くなったんで、

忠子 移転することになったんです。それで、跡地を買わないかって、社長さんが電話してくださって。相場よりずっと安い値段で譲ってくださいったんです。社長さんは辺見君のことが気に入ってたんでしょうね。

川地 その辺りは高台なので、見晴らしがいいですよ。川地さんも一軒いかがですか？
忠子 うち建て直したばかりです。お宅の会社で。

忠子 そこへ、堀田・ゆかりがやってくる。忠子が封筒を椅子に置いて、立ち上がる。

堀田 あら、堀田さん、こんな所でお会いするなんて。先程、鐘司がお宅の会社へ伺ったんですが。

堀田 来たよ。しかし、すぐに帰った。
忠子 ご用件は何だったんです？ うちの会社が何かご迷惑でもおかけしましたか？

忠子 知りたければ、鐘司君に聞きたまえ。
堀田 そうそう、これ、今、工事中の杏が丘ハイツのパンフレットです。よかったら、どうぞ。(パンフレットを差し出す)

堀田
忠子

結構。

そう言わずに、どうぞ。(パンフレットを押しつけて) この土地は前々から堀田さんが狙っていたそうですね。それなのに、ウチの会社がいたらいちゃって、申し訳ありません。でも、別に横取りしたんじゃないですよ。持ち主の方から、鐘司に買ってくれと言ってきたんです。社長、支店長さんお待ちです。あら、足止めしちやって、ごめんなさい。それじゃ、また今度。

ゆかり
忠子

忠子がよろめいて、うずくまる。川地・ゆかりが駆け寄る。

川地

忠子さん、どうしたんです。

忠子

大丈夫です。昨日から風邪気味なだけで。(気を失う)

川地

忠子さん!(忠子の額を触って) ひどい熱だ。(ゆかりに) 奥で休ませてもらいましょう。

川地・ゆかりが忠子を抱えて去る。堀田が椅子の上の封筒を持つ。中を見る。周囲を見回す。そこへ、ゆかりが戻ってくる。

ゆかり

社長、どうかしましたか?

堀田

何でもない。急用を思い出した。会社へ戻るぞ。

ゆかり

でも、支店長さんとの約束は?

堀田

後で詫びの電話でも入れておけ。行くぞ。

堀田・ゆかりが去る。

鐘司

（ベテルギウスに）叔母が休憩室で目覚めたのは一時間後でした。すぐに、封筒がないことに気づきました。フロアに戻ると、椅子の上には何もなかった。封筒は消えていた。

ベテルギウス

その封筒には、長門さんの家の頭金が入っていたんですね？

鐘司

ええ、五百万。周りを探しても、どこにもない。すぐに警備員に頼んで、銀行内を探してもらいましたが、やっぱりない。

シリウス

銀行へ行く途中で落したって可能性はないんですか？

鐘司

叔母も同じことを考えたようです。銀行を出て、うちの会社へ向かいました。封筒を探しながら。でも、見つからなかった。

②会社。忠子がやってくる。

鐘司

長門の五百万は、今月の銀行への返済に当てるはずだったんだ。支払いの期限は今日。今日中に支払わないと、うちの会社は倒産するんだよ。

忠子

わかっているよ、それぐらい。

鐘司

だったら、もう一度よく考えてくれ。ここを出る時、封筒はどこに持った？

忠子

バッグを肩にかけて、封筒は両手で持った。

鐘司

途中で誰かに会わなかった？

忠子

知り合いに何人か会った。立ち話をして、杏が丘ハイツのパンフレットを渡

鐘司

した。

鐘司

その時、下に落としたのかもしれない。知り合いに会った場所は覚えてる？

忠子

五人ぐらいの人に会ったんだよ。覚えてるわけないよ。

そこへ、二谷がやってくる。

二谷

どうかしたんですか？

鐘司

いや、別に。何かご用ですか？

二谷

一つお聞きしたいことがあります。みずの銀行の通帳が見当たらないんですが、どこにあるかご存じですか？

鐘司

それでしたら、今、叔母が持っています。叔母さん。

忠子

でも、鐘司。

鐘司

いいから、お渡しして。

忠子

(二谷に差し出して)どうぞ。

二谷

顔色がよくありませんね。何かあったんですか？

忠子

いいえ、別に。

鐘司

二谷さん、うちの帳簿に何か不審な点はありませんか？

二谷

今のところは何も。しかし、御社の経営状態は大体把握しました。正直言っ

鐘司

て、今まで倒産しなかったのはマジックですね。

二谷

社員が一丸となって努力してきた結果です。

鐘司

マジックには必ずタネがある。それが一体何なのか、私の手で必ず突き止めてみせます。

二谷が去る。

忠子

まずいよ、鐘司。あの通帳を見たら、五百万を入金してないことがバレちゃうよ。

鐘司

でも、渡さないわけには行かなかった。こうなったら、正直に話をしよう。私が五百万を失くしたって。

忠子

あの人が信じてくれると思うかい？

鐘司

話をする前に、警察に届けよう。遺失届を出すんだよ。そうすれば、あの人がだつて。

忠子

それも隠蔽工作だと思われたら？ とにかく、僕らは五百万を見つけ出すしかないんだ。もう一度、銀行へ行ってくる。途中に落ちてくる可能性がある。

鐘司

道路だったら、私がここへ帰ってくる時、探したよ。

忠子

見落としたかもしれないじゃないか。

鐘司

わかった。私も行くよ。また倒れたらどうするんだ。叔母さんは家へ帰って、休んでくれ。

忠子が去る。

ベテルギウ

鐘司

銀行までの距離はどれぐらいだったんですか？

シリウス

およそ八百メートル。歩いて、十分の距離でした。それを僕は一時間かけて歩きました。でも、見つからなかった。

鐘司

誰かが拾って、持っていったとは考えなかったんですか？

シリウス

やむを得ず、警察へ行って、拾得物はないか、聞きました。五百万が入った封筒。もちろん、あるわけなかった。

シリウス

そうでしょうね。

鐘司

僕はもう一度、銀行から会社へ向かいました。また一時間かけて。空はだんだん暗くなっていきました。会社に辿り着いた時、僕はぐったりと疲れていました。

そこへ、忠子がやってくる。

忠子

お帰り。やっぱり、なかったんだね？

鐘司

まだここにいたのか。僕は帰れって言ったのに。

忠子

家に帰っても、ジツとしていられないよ。ねえ、鐘司、もう諦めよう。

鐘司

諦めたら、どうなる？ 僕は脱税の容疑で逮捕される。会社は倒産する。社員は全員失業する。何もかもおしまいになるんだ。

忠子

実際、脱税はしてないんだから、罪にはならないよ。会社の方は、今晚中にお金を用意すれば。

鐘司

どうやって？ 僕にはそんな貯金はない。叔母さんだって、ないだろう？

忠子

誰かに貸してもらおう。そうだ、雪也に頼めばいいじゃないか。

鐘司

雪也は東京だ。今から電話しても、間に合わない。

そこへ、二谷がやってくる。

二谷

辺見さん、また一つお聞きしたいことが出てきたんですが。

鐘司

何でしょう。何でもお答えしますよ。

二谷

本日、五百万円が入金されたはずなんです。その金がどこにあるか、わからないんですよ。通帳にも記載がないし、金庫にも見当たらない。

鐘司　おかしいな。僕の机を探してみます。見つかったら、すぐに持っていきますから。
二谷　もうすぐ五時だ。なるべく急いでくださいよ。

二谷が去る。

忠子　どうするんだよ、鐘司。

鐘司　僕は銀行へ戻る。

忠子　何のために。

鐘司　支店長に頼むんだよ。支払いを待ってくれって。二谷さんに聞かれたら、急用があつて出た、すぐに戻るって言ってくれ。

忠子　私一人じゃ、ごまかせないよ。

鐘司　ごまかすんだよ、何が何でも！　できるだろう、それぐらい！　金を失くしたの

忠子　のはあんなだから！

鐘司　……

鐘司　ごめん。なるべく早く戻るから。

忠子が去る。

シリウス
鐘司

それで、支店長は支払いを待ってくれたんですか？
その支店長は今年の四月に転任してきたばかりだった。まだ付き合いが浅かったんです。最初はすぐに断られたんですが、何度も頭を下げたら、明日の正午までなら待ってもいいと。

ベテルギウ
鐘司

たったの半日しか伸ばしてくれなかったんですか？
僕はその足で別の銀行へ行きました。五百万の融資を頼みに。でも、社内で検討してからでないと、金は出せないって。

ベテルギウ

検討して、どれぐらいかかるんです。

鐘司

僕もそう思って聞いてみたら、最低一週間はかかるだろうって。

プロキオン

一週間？ それじゃ、間に合わない。

鐘司

後は知り合いに頼むしかない。僕は自宅へ向かいました。

①一九八三年十二月二十四日夕、辺見宅。辺見鈴花がやってくる。

鈴花

お父さん、お帰りなさい！

鐘司

ただいま。鈴花、お母さんとおばあちゃんは？

鈴花

食事の支度。ねえ、お父さん、これを見て。(ぬいぐるみを差し出して) 洋

代お婆さんのプレゼント。ついさつき、速達で届いたの。

鐘司
鈴花

そうか。よかつたな。
ぬいぐるみなんて、子供っぽいけど、さすがに洋代お婆さんだけあって、センスがいいよね。でも、ちょっと触っただけなのに、鈴が取れちゃったの。お父さん、つけてくれない？

鐘司

わかつた。後でな。

鈴花

えー？ 今、つけて。ねえ、いいでしょう？

鐘司

お父さんは今、忙しいんだ。後でいいだろう。

鈴花

イヤだ。今、つけて。(鈴を差し出す)

鐘司

うるさい！ 俺は後にしろって言ったんだ！

そこへ、碧・友枝がやってくる。

友枝

どうしたんだい、鐘司。大きな声を出して。

鐘司

何でもない。鈴花、怒って悪かつたな。ほら、鈴を貸してごらん。

鈴花

(鈴を差し出す)

鐘司

(受け取って)お父さんは今、本当に忙しいんだ。だから、明日の朝までに

鈴花

つけておく。それでいいだろう？

碧

(うなづく)

鐘司

(鐘司に)お帰りなさい、あなた。会社で何かあったの？

別

別に何も。これからまた会社へ戻らなきゃいけない。食事は先にみんなで食べ

べてくれ。

鐘司が電話をかける。別の場所に、洋代がやってくる。碧・友枝・鈴花は去る。

洋代

鐘司

洋代

鐘司

洋代

鐘司

洋代

鐘司

洋代

鐘司

洋代

鐘司

洋代

鐘司

鐘司が電話を切る。洋代が去る。

はい、榎本です。

洋代さんだね？ 鐘司です。

あ、お義兄さん。鈴花ちゃんへのプレゼント、届きました？

ああ、届いた。鈴花のやつ、とつても喜んでるよ。それより、雪也に話があるんだけど、帰ってきてる？

いいえ、今頃は船の上です。知り合いの国会議員が、クリスマスを海の上で

祝おうって言い出して、船上パーティーを企画したんです。私は船に弱いか

ら断つたんですけど、雪也は断り切れなくて。

急いで雪也と話がしたいんだけど、連絡先はわかるかな？

調べればわかりますけど、何しろ船の上ですからね。話なら、明日の朝にし

た方が。

帰ってくるのは、明日の朝なの？

ええ、午前十時の予定です。

十時？ それじゃ、間に合わないんだ。

何が間に合わないんですか？

いや、こつちの話だ。わかった。じゃ、また明日電話する。

ベテルギウ
鐘司

東京から笛田まで、どれぐらいかかるんです。
どんなに車を飛ばしても、三時間。雪也のことは諦めるしかありませんでした。

シリウス

鐘司

シリウス

鐘司

プロキオン

鐘司

そこへ、碧・友枝・鈴花がやってくる。

でも、知り合いは他にもいたんでしよう？ 東京じゃなくて、笛田にも。僕は片っ端から電話をかけました。親戚、高校時代の友人、取引先の社長。でも、留守だったり、そんな大金は無理だって断られたり。急に五百万は無理でしょう。でも、五人から百万ずつ借りれば。そんなことは僕だって考えました。だから、百万でいいって言っただけです。でも、うちの会社の経営が苦しいことはみんな知ってる。貸しても返ってこないかもしれない。そう思ったんだと思います。弟さんさえ捕まれば、何とかなつたのに。十人以上に電話して、気づいた時には六時を過ぎていました。

碧 鐘司

鐘司

碧 鐘司

鐘司

友枝 鐘司

鐘司

友枝 鐘司

鐘司

友枝 鐘司

ねえ、あなた、会社の経営が危ないの？
それは君が気にすることじゃない。
でも、放っておけない。お願いだから、本当のことを話して。
会社へ戻る。今夜は遅くなるから。
待ってよ、あなた。お金が必要なんでしょう？ 私の実家に頼めば、少しぐらいなら出せると思う。ねえ、いくら必要なの？
五百万だよ、五百万！ そんな大金、君の親が持つてるのか？
鐘司、碧さんのご両親をバカにするんじゃないよ。
お母さんは黙っててくれ。
おまえには碧さんの気持ちかわからないのかい？ おまえのことを助けたいんだよ。

鐘 鈴花

鐘 鈴花

鐘 鈴花

友 鈴花

鐘 鈴花

鐘 鈴花

鐘 鈴花

鐘 鈴花

鐘 鈴花

友 鈴花

友 鈴花

② 堀田・友枝・鈴花が去る。
堀田・ゆかりがやってくる。

誰が助けに来てくれたって言った？ 俺は俺の力で何とかしてみせる！

(泣き出す)

鈴花、あなたは自分の部屋へ行つてなさい。

泣くな、鈴花。

鈴花、おぼあちやんと一緒に行こう。

(鈴花に)泣くなと言ってるのが、聞こえないのか！

お父さんじゃない。

何だと？

こんな人、お父さんじゃない！

鈴花！(鈴花を抱き締める)

鐘司、おまえのお父さんはどんなに苦しくても、子供に八つ当たりはしなかつたよ。おまえは父親失格だ。

いつもはこんな時間までいないんだがな。君が来るのを待っていたんだ。

なぜ僕が来ると知ってたんですか？

別に知っていたわけじゃない。しかし、来ると確信していた。昼間の話とも

う一度したいんだらう？

昼間の話？

惚けるのはやめたまえ。君に、うちの会社の事業部長になつてくれと頼んだ

だらう。その後、冷静になつてみて、考えが変わつたんじゃないか？

鐘司 句はないな？
僕がいなくなったら、辺見工務店はすぐに潰れます。結局、同じことじゃないですか。

堀田 まだわからないのか、鐘司君。私は君の会社が目障りなんだ。今すぐにも潰したいんだ。

ゆかり 社長、いくら何でも、それはひどすぎます。
鐘司 失礼しました。

鐘司が去る。

ゆかり 辺見先輩、ちよつと待って！

堀田 やめろ、ゆかり。

ゆかり でも、私には放っておけません。

堀田 あの男を助けて、何になる。あいつはおまえじゃなくて、別の女を選んだんだぞ。

ゆかり そんなことはわかってます。でも、私はあの人の力になりたいんです。
堀田 しかし、あいつはこれで終わりだ。おまえもあいつのことは忘れろ。その方がおまえのためだ。

堀田・ゆかりが去る。

③ 喫茶店。鐘司がやってくる。反対側から、川地がやってくる。

川地 珍しいな。こんな時間に君が来るなんて。

鐘司 夜は酒を出すんですよね？
川地 最近、東京ではカフェバーっていうのが流行ってるらしい。その真似だよ。
鐘司 ウィスキーをください。ストレートで。
川地 わかった。

鐘司 川地さん、神様に祈ったことはありますか？
川地 しよっちゅう祈ってるよ。店を黒字にしてください。息子を高校に合格させてください。女房の機嫌を直してください。

鐘司 祈りは通じましたか？

川地 通じたり、通じなかったりだ。でも、今の私は幸せだ。ということは、通じたことの方が多かったんじゃないかな。

鐘司 (両手を組み、目を閉じて、祈る)

川地 はい、お待たせ。(グラスを置いて) 何を祈ってるんだ？

鐘司 何でもありません。(グラスを叩いて) おかわり、いいですか？(グラスを

差し出す)

川地 (受け取って) もちろんいいが、もう少し味わって飲んだらどうだ。

そこへ、長門がやってくる。

長門 鐘司、こんな所にいたのか。

川地 どうした、長門君。辺見君を探しに来たのか？

長門 碧から電話がありましたね。会社へ戻るって言ったのに、電話してみたら、いなかった。心配だから、探してくれって。

川地 (鐘司に) 夫婦喧嘩でもしたのかね？(グラスを置いて) それとも、会社で

鐘 川 鐘 川 鐘 長 鐘 長 鐘 長 鐘 川 長 鐘
地 司 地 司 地 司 門 司 門 司 門 司 地 門 司 門 地 門 司

何かあつたのか？ そう言えば、昼間、忠子さんが銀行で熱を出して、倒れたな。その後、具合はどうだ。

(グラスを呷って) もう一杯ください。(グラスを差し出す)
おいおい、そんな調子で飲んだら、体を壊すぞ。

(グラスを突き出して) いいから、ください！

わかったから、大きな声を出すな。(グラスにウイスキーを注ぐ)

鐘司、それを飲んだら、家に帰れ。帰りにくいなら、俺と一緒にいていつやるから。

(グラスを呷って) もう一杯。(グラスを差し出す)

やめろ、鐘司。

そうだよ、辺見君。何かあつたか知らないが、やけ酒も程々にしないと。

(川地の手から瓶を奪い取る)

おい、鐘司。(鐘司の腕を掴む)

(長門の手を振り払って) 放せ！(瓶を呷る)

いい加減にしろよ、鐘司。こうなったら、力づくで連れて帰るからな。

帰れないんだよ。

え？

金を手に入れないと帰れないんだ。

一体何があつたんだ。よかつたら、話してくれ。力になるから。

だつたら、百万貸してください。たつた今。

私はこの店を建て直したばかりだ。そんな大金は手元がないよ。

今、力になるって言ったじゃないか。(川地の腕を掴む)

言つたよ。しかし、私にだって、できることとできないことが。

長門
鐘司
（鐘司の腕を掴んで）やめろ、鐘司。
（長門の手を振り払って）放せ！

長門が鐘司を殴る。鐘司が倒れる。

川地
大丈夫か、辺見君。（長門に）何も殴らなくても。

長門
（鐘司に）済まなかった。でも、今夜のおまえはおかしいぞ。

川地
（鐘司に）さあ、立ちたまえ。

川地が鐘司を立たせる。鐘司が川地の手を振り払い、去る。

川地
辺見君！（長門に）追いかけた方がいいんじゃないか？

長門
一人になって、頭を冷やした方がいいんですよ。

川地
彼との付き合いは二十年以上になるが、あんな姿を見るのは初めてだ。よほど辛い目に遭ったんだろうな。

④ 川地・長門が去る。
鐘司がやってくる。

シリウス
そうして、この橋にやってきたんですね？

プロキオン
笛田橋は全長二〇七メートル、幅員六、五メートル。笛田市内で一番大きな橋です。

ベテルギウ
（鐘司に）あなたはここへ自殺するために来たんですね？

鐘司

そこまではつきり決めていたわけじゃありません。ただ、もう何もかもがいやになつていたんです。僕はさつき、神様に祈りましたよね？ 何て祈ったかわかりますか？

ベテルギウ

助けを求めたんじゃないですか？

鐘司

そうですね。僕は「神様、助けてください」と祈ったんです。でも、結果はどうですか？ 僕は長門に殴られた。僕が手に入れたのは、金じゃなくて、殴られた痛みだった。おかげで、思い知ったんです。やっぱり、神様なんていないんだって。

ベテルギウ

神様は天国にいらつしやいますよ。

鐘司

でも、僕を助けてはくれない。その時、生命保険のことを思い出したんです。僕が死ねば、一千万が下りる。これで、会社は潰れずに済む。

シリウス

でも、あなたが死んだら、会社は潰れる。堀田さんにそう言ったじゃないですか。

鐘司

堀田さんはこうも言いました。君は今日まで本当によく頑張ってきた。でも、もう十分だろうって。

シリウス

辺見さん。

鐘司

碧、鈴花、お母さん、叔母さん、社員みんな。僕を許してくれ。

シリウス

辺見さん！

鐘司が欄干から身を乗り出す。シリウスが鐘司の腕を掴む。鐘司が振り払う。シリウスが鐘司に掴みかかる。鐘司がかわす。シリウスが橋から落ちる。鐘司が橋の下を覗き込む。下へ飛び下りる。

①一九八三年十二月二十四日夜、バス停。

ベテルギウ

辺見さん、ありがとうございます。

鐘司

長い話になるだろうとは思っていましたが、まさか一時間以上もかかるとは。

プロキオン

プロキオンさんでしたよね？

記録、大変だったんじゃないですか？

ベテルギウ

ええ。でも、仕事ですから。 辺見さん、天国へ行きたいという気持ち、今も変わりませんか？

鐘司

もちろんです。あなたの方はいかがですか？ 僕の話に納得していただけたか？

シリウス

私は納得できませんでした。だって、あなたはたった五百万の金のために死

鐘司

のうとしてるんだ。バカバカしいとは思わないですか？

シリウス

思いません。僕が死ねば、家族に一千万が支払われるんだから。

鐘司

あなたの命に比べたら、一千万だって、安すぎる。 金の話は本当はどうでもいいんです。僕はもうこれ以上、生きていたくない

ベテルギウ

んだ。 碧さんにも鈴花ちゃんにもお母さんにも会えなくなるんですよ。

鐘司

構いません。

ベテルギウ

忠子さんにも雪也さんにも洋代さんにも会えなくなるんですよ。

鐘司

シリウス

鐘司

ベテルギウ

鐘司

プロキオン

鐘司

シリウス

鐘司

ベテルギウ

プロキオン

鐘司

ベテルギウ

鐘司

僕は彼らに何をしました？ 怒りを撒き散らして、傷つけた。いくら金がなく困っていたからって、ひどすぎる。許されることじゃない。

許されませよ。あなたが心を込めて、謝れば。

もしみんなが許してくれたとしても、僕自身が許せない。僕はいなくなった方がいいんだ。

いなくなつた方がいい人なんていませんよ。

いますよ。この僕がそうです。僕の人生は無駄だった。あの日から、間違つた道に進んだんです。

一九六一年の四月ですか？

ガガーリンのニュースを聞いて、野球部を辞めた日からです。東大を目指して、勉強したのも無駄だった。父の跡を継いで、辺見工務店の社長になつたのも無駄だった。

なぜ無駄だったと断言できるんです。

苦勞して苦勞して苦勞して、それでも幸せになれなかつたからです。

もしそれが事実だとしても、あなたはたくさんの人を幸せにしましたよ。そうですね、プロキオン？

家族、友人、社員、お客さん。ここに書いただけでも、百人以上の人が幸せになつています。

僕の方こそ、聞きたい。なぜ幸せになつたと断言できるんです。たとえば、碧だ。僕は碧をいまだに新婚旅行に連れていつてないんですよ。僕なんかと結婚しなければ、ずっと幸せになれたのに。

そうでしょうか。

そうに決まっています。僕は碧を幸せにしてない。むしろ、不幸にしたんだ。

他の人たちだって、同じです。僕がいなければ、もっと幸せなっていた。僕は、僕は生まれてこなければよかったんだ。

シリウス 僕が生まれなかった世界？

鐘司 いいですか、所長？

シリウス わかりました。許可しましょう。でも、辺見さん、これだけは知っておいて

ベテルギウス ください。本当のことを言えば、あなたは今夜、死ぬ運命でした。

鐘司 本当ですか？

ベテルギウス しかし、夜の九時頃から、この監視所にたくさんの祈りが届いたんです。そ

れはみんな、長野県の笛田市に住む人たちからのものでした。その数、実に

千以上。祈りの中身はみんな同じでした。「辺見鐘司を助けてください」

鐘司 嘘だ。

ベテルギウス これほどの数の祈りを無視するわけには行きません。私は直ちにシリウスを

地上へ送りました。残念ながら、あなたを救うことには失敗しましたが。

シリウス (鐘司に) 私は何としてもあなたを助けなければならぬんです。さあ、つ

いてきてください。

鐘司 どこへ行くんです。

シリウス だから、あなたが生まれなかった世界ですよ。

プロキオン 行ってらっしゃい、辺見さん。

② 鐘司・シリウスが歩き出す。プロキオン・ベテルギウスが去る。
バーの前。

鐘司
シリウス
鐘司
シリウス
鐘司

ここは？
川地さんのお店ですよ。わかりませんか？
懐かしいな。これは、建て直しをする前の店だ。
この世界では建て直しをしなかつたんですよ。入ってみますか？
ええ。

喫茶店。

川地が椅子に座って、ウイスキーを飲んでいる。

鐘司
川地
鐘司
川地
鐘司
シリウス
川地
鐘司
シリウス
川地
シリウス
鐘司
シリウス

川地さん、何をしてるんです。
誰だ、あんた。
惚けるのはやめてください。辺見鐘司ですよ。
覚えがないな。で、ここへは何しに来た。客なら、何か注文してもらおうか。
ホットミルクをください。(鐘司に)あなたは何にします？
(川地に)じゃ、僕もホットミルクを。
了解。
(鐘司に)川地さんがあなたを知ってるわけないでしょう？ あなたはこの世界では生まれてないんだから。
一体、あの人はどうしちゃったんです。仕事中に酒を飲むなんて。
「オードリ」は二十二年前に潰れかけました。ガス爆発が起きて、多数の怪我人が出たんです。川地さんは銀行からお金を借りて、何とか店を再開させましたが、お客さんはすっかり減ってしまつた。昼はまだしも、夜は大抵、川地さん一人なんです。
僕の知ってる川地さんは、あんなだらしない人じゃない。

シリウス　それはお酒のせいでしょう。朝から晩まで、ずっと飲んでますからね。
鐘司　そんなことをしたら、体を壊してしまふ。
シリウス　それは本人にもよくわかっています。でも、飲まずにいられないんです。

川地がグラスにウイスキーを注ぐ。鐘司が川地の手を押さえる。

鐘司　それぐらいにしておいたらどうです。
川地　何をする。
鐘司　病気になるってから後悔しても、遅いんですよ。あなたにもしものことがあつたら、奥さんと息子さんが悲しみます。
川地　あいつらが俺のことなんか、気にするもんか。
鐘司　そんなことはありません。
川地　だったら、なぜ出ていったんだ。俺を見捨てて。
シリウス　それは、あなたが酔っ払って、息子さんを殴ったからでしょう。
川地　あいつは俺に生意気な口を叩いた。親が子供を叱るのは当然のことだ。
シリウス　息子さんにはあなたにお酒をやめてくれと言っただけです。
川地　それが生意気だと言ってるんだ。俺が何をしようと、俺の勝手だろう。
鐘司　それは違う。父親には子供を幸せにする責任がある。
川地　俺はできるだけのことをしてきた。贅沢はさせられなかったが、三度三度の飯はきちんと食わせたし、高校にも行かせた。
鐘司　僕は金の話をしてるんじゃない。心の話をしてるんです。
川地　出ていけ。
シリウス　でも、私たちが注文したものは？

川地
シリウス

おまえらに飲ませるものは何もない。いいから、とつとと出ていけ。
行きましよう、辺見さん。

鐘司

川地さん、お願いします。酒をやめて、まじめに仕事をしてください。そうすれば、奥さんと息子さんは帰ってくるかもしれない。

川地
シリウス

黙れ！
さあ、辺見さん。

③ 鐘司・プロキオンが店の外に出る。川地が去る。
会社の前。

鐘司

ここは僕の会社があつた場所ですよね？
ええ。でも、この世界では違います。

鐘司
シリウス

辺見工務店は潰れたんですか？
お父さんが亡くなつた後、会社は忠子さんが引き継ぎました。しかし、あの
人に経営は無理だった。わずか一年で会社は経営危機。そこへ救いの手を差

鐘司

し伸べたのが、堀田さんでした。

鐘司
シリウス

堀田さんが会社を買ひ取つたんですか？
社長に就任して、会社の名前を堀田工務店に変えました。おかげで、経営は
持ち直し、今では笛田一の建設会社になつています。

鐘司

堀田さんのことだ。さぞかし儲かつてるんでしょうね。

シリウス

堀田さんは五年前に社長を退任しました。次の社長はなんと、ゆかりさんだ
つたんですよ。中に入つてみますか？

鐘司

ええ。

会社。ゆかりが仕事をしている。

ゆかり どちら様ですか？

シリウス 笛田新聞の記者です。昼間、取材にお伺いするとお電話したんですが。

ゆかり ごめんなさい。私、聞いてない。

シリウス 来月の特集で、笛田市内で活躍する女性経営者を毎日一人ずつ紹介して

うって企画なんです。よかったら、インタビューさせてもらえませんか？

ゆかり 悪いけど、遠慮させてください。

シリウス どうしてですか？

ゆかり だって、人に聞かせるような話ではないもの。私は伯父がしてきたことを

シリウス なぞってるだけだし。

ゆかり でも、今や笛田を代表する建設会社じゃないですか。

シリウス そうみたいね。でも、私には全然実感が無い。毎日仕事に追いまくられて、

ゆかり 旅行にも行けないのよ。

そこへ、忠子がやってくる。

忠子 社長、これ、支払いの一覧表です。(ゆかりに書類を渡す)

鐘司 叔母さん、まだこの会社にいたの？

忠子 あなたは？

シリウス 我々は笛田新聞の記者です。この人は十九年前にもこちらに取材に来たこと

がありまして。(鐘司に) その時、会ったんですよね？

忠子
鐘司
忠子

ゆかり

忠子

ゆかり

忠子

ゆかり

忠子

ゆかり

鐘司

ゆかり

鐘司

ゆかり

鐘司

ゆかり

鐘司

十九年前って言ったら、兄が亡くなった年？
そうですね。その頃、あなたはお兄さんを助けて、經理の仕事をしていました。
おかげ様で、今も同じ仕事をやらせてもらってます。堀田さんには本当に感謝しています。

辺見さん、これ、来月分のないけど。

社長はさつき、今月分のがほしいと。

そんなことは言っていない。すぐに作って、持ってきて。

でも、もう遅いですし、明日にしていいますか？

ねえ、辺見さん。私が伯父に比べて、経営の能力が下だつてことはわかつて

る。あなたから見たら、さぞかし頼りない社長でしょうね。でも、私は私なりに努力しているの。お願いだから、少しは協力してよ。

私は協力しているつもりですが。

だつたら、今すぐ持つてきなさいよ。来月分の一覧表。

まあ、そう言わないで。今夜はクリスマススイブだよ。そろそろ仕事は切り上げて、家に帰った方がいい。

あなたは口出ししないで。この会社の社長は私よ。

知ってるよ。でも、君は本当は社長にはなりたくなかったんじゃないか？

それならそうと、堀田さんに言えばいいんだ。

そんなこと、できるわけじゃないでしょう？

どうして。君が頼めば、すぐに堀田不動産に戻してもらえるよ。

伯父は去年、引退したの。病気で倒れて。だから、堀田不動産はもう別の人のものなの。この会社を辞めたら、私には行く所がないのよ。

信じられない。あの堀田さんが病気になるなんて。

シリウス
ゆかり

堀田さんは働きすぎだったんです。仕事があの人を壊したんですよ。
帰ってください。インタビュ―は遠慮させてくださいって言ったはずですよ。
ゆかり君。

いいから、帰って！早く！

ゆかり・ミエが去る。

①一九八三年十二月二十四日夜、辺見宅の前。

シリウス どうです。ここは変わってないでしょう？

鐘司 僕の家だ。中には誰が住んでるんですか？

シリウス あなたのお母さんが一人で暮らしています。

鐘司 一人で？

シリウス お父さんが亡くなった時、引越しも考えたようですが、やっぱり長年暮ら

した家を出るのはいやだったんでしよう。

鐘司 母はどうやって生活を？

シリウス 近所のスーパーでレジを。勤続十九年で、その店では一番の古株になりました。

鐘司 た。店長にも頼りにされてるようですよ。

シリウス 病気になるったりはしてないでしょうね？

鐘司 会っていききますか？

鐘司 ええ。

辺見宅。友枝がやってくる。

友枝 どうぞ、中へお入りください。

シリウス
友枝
シリウス
忠子
シリウス
鐘司
友枝
鐘司
友枝
シリウス
友枝
シリウス
友枝
シリウス
鐘司
友枝

すみません、こんな時間にお邪魔しちゃって。

いいんですよ。うちは一人暮らしで、滅多にお客さんが来なくて。だから、大歓迎です。今、お茶を淹れますからね。

あ、どうか、お構いなく。

でも、外は寒かったですでしょう。お茶でも飲んで、体を温めないと、風邪を引きますよ。

私は、風邪を引いたことは一度もありません。

(友枝に) あなたは体の具合は？ どこか悪い所はないんですか？

近頃、物忘れがひどくなってきましたけど、それ以外は全然。

そうですか。よかったです。

それで、今日はどのようなご用件で？

先程も言いましたけど、私たちは昔、この近くに住んでたんです。今から十九年前まで。

そうだったんですか。えーと、お名前は何と仰いましたっけ？

堺です。実は、私の兄は俳優でしてね。デビュー二十周年を記念をして、自伝を書くことになったんです。で、子供の頃のことをご存じの方に、取材をして回っているところ。

お住まいはどの辺りだったんですか？

ここからほんの少し行っ、ほんの少し返ってきた所です。

小学校は笛田第一？

(鐘司に) 笛田第一？

(友枝に) ええ、笛田第一です。

それじゃ、雪也と一緒にだったかもしれない。雪也のことはご存じですか？

鐘司
シリウス

場にいなかったんだから。
僕は母に嘘をつきました。
嘘って？

鐘司
シリウス

雪也といろんな遊びをしたって言ったでしょう？ それは、僕にとっては本当のことです。でも、この世界では、僕は生まれてない。雪也は十歳で亡くなるまで、ずっと一人だったんだ。

鐘司
シリウス

彼には友達もいませんでした。いつも一人で遊んでいました。やっぱりね。あいつは子供の頃、内気で泣き虫だったんです。僕がいないと、何もできないやつで。

シリウス

これでよくわかったでしょう。あなたがいたおかげで、雪也君は助かった。川地さんも助かった。あなたはたくさんの人たちを幸せにしたんです。

鐘司
シリウス

碧は？ この世界の碧はどうしていますか？

鐘司
シリウス

安心してください。ちゃんと生きてますよ。

鐘司
シリウス

結婚は？

鐘司
シリウス

しました。一年前に。相手は従兄の長門さんです。

鐘司
シリウス

碧が長門と？ 信じられない。

シリウス

長門さんは若い頃から職を転々としてましてね。長門さんのお母さんは、結婚すれば落ち着くだろうと、碧さんに頼み込んだんです。碧さんは何度も断

鐘司
シリウス

ったんですが、最後は親戚一同に説得されて。

鐘司
シリウス

じゃ、碧は長門の家にいるんですね？

シリウス

会いに行くんですか？ それはやめた方がいいですよ。

鐘司
シリウス

なぜですか？

シリウス

碧さんも幸せじゃないからです。長門さんは結婚しても、変わりませんでし

鐘司
シリウス
鐘司
シリウス

路上。碧がやってくる。

た。相変わらず、職を転々として、今は失業中。朝から晩まで、パチンコです。生活費は碧さんが一人で稼いでいます。図書館で司書をして。今日だつて、クリスマスママスイブなのに、残業ですよ。碧さんは仕事と家事で疲れ切つてる。そんな姿を見て、一体何になるんです。碧は今、図書館にいるんですね？
（走り出す）
そろそろ仕事を終えて、家に着く頃です。
辺見さん、待ってください！

鐘司
碧
鐘司
鐘司
鐘司
鐘司
鐘司
鐘司

あの。
何か。
蜂谷碧さんですよ？ 初めまして。僕は辺見鐘司という者です。
初めまして。
実を言うと、僕があなたに会うのは、今日が初めてじゃないんです。僕は笛田高校の出身で、あなたの二年上でした。
ごめんなさい。覚えてません。
そうでしょうね。でも、僕はよく覚えてます。授業が終わった後、図書室へ行くと、あなたはいつも一人で本を読んでいた。地味だけど、キレイな子だなって思ってたんです。今は全然地味じゃなくなったけど。
あの、私に何かご用ですか。
僕はただ、あなたと話がしたくて。そうだ。これから食事でもどうですか？

鐘司

私は家で主人が待ってますので。

碧

そう言わずに、一時間だけ。二人で高校時代の話をしましょう。あなたは坂本九が好きでしたよね？『見上げてごらん夜の星を』とか。

鐘司

どうしてそれを？
あなたのことは何でも知ってるんです。僕はあなたが好きだったんです。ずっと。

碧
鐘司

でも、私はあなたのことを何も知りません。
わかっています。でも、もし高校の時に出会っていたら、僕たち二人は結婚

するはずだったんです。子供が一人生まれて、鈴花って名前をつけて。鈴花はとっっても生意気な子で、ぬいぐるみの鈴が取れると、「お父さん、つけて」

って、僕に鈴を押しつけてきて。そう、この鈴です。（ポケットに手を入れ

て）あれ？どこへ行ったんだ？

碧

私、帰ります。
待ってください。もう少しだけ、話をしてください。

鐘司

近寄らないで。それ以上、近寄ったら、大きな声を出しますよ。

碧

誤解しないでくれ。僕はただ、君と話がしたいだけで。（碧の手を掴む）

放して！放してください！

そこへ、長門がやってくる。

長門

碧、どうした。

碧

この人がいきなり話しかけてきて。

長門

（鐘司に）俺の女房に何の用だ。

鐘司 僕は何もしてない。そうだろう、碧？

長門 だったら、碧から離れる。(鐘司の肩をつかむ)

鐘司 放せ！(長門の手を振り払う)

長門 こいつ、抵抗するつもりか？

シリウス 辺見さん、行きましよう。

長門が鐘司の腕をつかむ。鐘司が振り払う。長門が鐘司に殴りかかる。鐘司が避けて、長門を突き飛ばす。

長門 貴様！

シリウス 暴力はやめてください。私たちはもう行きますから。

長門 このままで済むと思ってるのか？ 人の女房にちよっかい出しやがって。

鐘司 違うんだ。僕はただ、碧を励ましたかっただけで。

長門 黙れ！

長門が鐘司に殴りかかる。鐘司が避けて、長門を殴る。長門が倒れる。鐘司が走り去る。シリウスが後を追って、走り去る。碧が長門に駆け寄る。

碧 秀ちゃん、大丈夫？

長門 大したことはない。それより、あいつ、おまえのことを碧って呼んでたな。

碧 高校の時の先輩だって言ってた。私は覚えてないけど。

長門 本当か？

碧 どうして疑うの？

長門
碧

碧、俺はおまえがいなくなったら、生きていけないんだ。
私はずっと秀ちゃんのおそばにいる。そのかわり、秀ちゃんも早く仕事を見つけて、まじめに働いて。二人で幸せになろうよ。

③ 碧・長門が去る。
橋。鐘司が走ってくる。後から、シリウスが走ってくる。

シリウス

待ってください、辺見さん！

鐘司

もういい。もう十分だ。元の世界へ帰らせてくれ。

シリウス

元の世界って？

僕が生まれた世界だ。碧は僕と出会って、結婚して、鈴花を産んだ。新婚旅行には行けなかったけど、温かい家庭を作った。この世界の碧より、ずっと幸せになった。

シリウス

でも、その幸せは今日で終わりです。あなたが死んだから。

鐘司

いや、僕は死なない。

シリウス

でも、あなたは天国へ行くんですし？

行かない。今、行くわけには行かないんだ。碧を不幸にするわけには行かないんだ。碧だけじゃない。鈴花も、お母さんも、叔母さんも、他のみんなも。会社が潰れたって、死ぬわけじゃない。そこからまたやり直せばいいんだ。

シリウス

それじゃ、あなたは地上へ戻るんですね？

鐘司

ああ、戻る。僕を地上へ戻してくれ。僕を生き返らせてくれ。

シリウス

もう一度、言ってください。

鐘司

僕を生き返らせてくれ。

シリウス 所長！

そこへ、プロキオン・ベテルギウスがやってくる。

ベテルギウス いいでしょう。辺見さんを地上に戻しなさい。

そこへ、川地が走ってくる。

川地 辺見君！

鐘司 来るな！ 俺は地上に戻るんだ！

川地 しっかりしろ、辺見君。

鐘司 シリウス！ 早く俺を連れてってくれ！

川地 辺見君、君は誰に向かって、話をしてるんだ？

鐘司 誰って。(シリウスを見る)

シリウス (首を横に振る)

川地 (鐘司に) 私と一緒に帰ろう。碧さんが家で待ってる。

鐘司 碧が家で？ 僕の家ですか？

川地 そうだよ。決まってるだろう。

鐘司 でも、この世界の碧は長門と結婚していて。

川地 大分酔っ払ったらしいな。いいか、辺見君。君は十三年前に碧さんと結婚し

た。そして、十年前に鈴花ちゃんが生まれた。

鐘司 鈴花が生まれた？ でも。(ポケットに手を入れて、鈴を出す) これは。

川地 それは鈴だよ。そんな物がなぜポケットに入ってるんだ？

鐘司

鈴花から預かったんです。ぬいぐるみから取れたから、つけてくれて。
(泣く)

川地

どうしたんだ、辺見君。なぜ泣くんのだ。

鐘司

メリー・クリスマス。メリー・クリスマス、川地さん！

川地

メリー・クリスマス、辺見君。

鐘司

帰りましょう、僕の家。碧と鈴花にも、メリー・クリスマスって言わないと。

鐘司・川地が走り去る。

ベテルギウ

お見事でした、シリウス。

シリウス

いいえ、褒めるなら、私じゃなくて、辺見さんを褒めるべきです。あの人が生まれなかつた世界があんなにひどいものになるなんて、私自身、予想していませんでした。

プロキオン

やっぱり、死んではいけない人だったんですね。

ベテルギウ

だから、千人以上の人が「助けてください」と祈ったんですよ。その祈りに応えることができてよかった。それでは、私たちも辺見さんの生還を祝って、乾杯しましょうか。

シリウス

所長、肝心なことを忘れてませんか？

ベテルギウ

肝心なこと？

シリウス

この任務が成功したら、一級天使に昇格させてくださるって仰いましたよね？

ベテルギウ

プロキオン、乾杯の用意をしないさい。

プロキオン

はい、ただいま。

シリウス 所長！

プロキオン・シリウス・ベテルギウスが去る。

①一九八三年十二月二十四日夜、辺見宅。鐘司・川地がやってくる。

鐘司 碧！ 碧！

そこへ、友枝がやってくる。

友枝 鐘司、おまえ、無事だったんだね？

鐘司 お母さん、メリー・クリスマス！（友枝を抱き締める）
何するんだよ。私はアメリカ人じゃないよ。

友枝 いいじゃないか。僕は今、とっても幸せなんだ。
おまえ、今までどこに行ってたんだい。

川地 笛田橋にいました。橋の上でボーツと立ってたんです。
（鐘司に）まさか、川に身投げしようとしてたんじゃないだろうね？

鐘司 違うよ。ちよっと夢を見てたんだ。天使が三人出てくる夢を。

友枝 天使が三人？
鐘司 そんなことより、碧は？

友枝 出かけたよ、おまえを助けるために。話は全部、忠子さんから聞いた。あの
人、五百万を失くしたんだってね。

そこへ、忠子・二谷がやってくる。

忠子

鐘司、お帰り。

鐘司

叔母さん、メリー・クリスマス！（忠子を抱き締める）

忠子

何するんだよ、気持ち悪い。

鐘司

まあまあ、そう言わないで。あれ？ 二谷さん。

二谷

ご自宅までお邪魔して、申し訳ありません。しかし、私はあなたをずっと待

っていたんですよ。

鐘司

僕を？

二谷

あなたは五百万が見つかったら、すぐに持っていくと言った。それが午後五

時のことです。今は午後十一時。六時間もあれば、見つけ出すことができました

でしょう。さあ、ここに出してください。

鐘司

申し訳ないけど、金はありません。

二谷

そう言うだろうと思っていました。忠子さんの話によると、五百万はどこか

に消えてしまったそうですね。しかし、脱税した人間は、大抵、消えた、盗

まれたと言っています。

鐘司

僕は脱税なんかしてません。

二谷

私が信じると思えますか？ これ以上、嘘を続けるなら、私は警察に通報し

なければなりません。

そこへ、碧・長門がやってくる。長門が大きな籠を持っている。中にはたくさんの金が入っている。

碧

鐘司

碧

長門

長門

碧

長門

鐘司

長門

川地

鐘司

そこへ、雪也・洋代がやってくる。

あなた、無事だったのね？

お帰り、碧。その金は？

この町の人たちが寄付してくれたの。これ、全部。

(鐘司に) おまえは碧に感謝すべきだぞ。碧はこの籠を持って、知り合いの

家を一軒一軒回ったんだ。「辺見鐘司を助けてください」って。

(鐘司に) 皆さん、快く出してくれた。砂尻の人なんか、一人残らず。

(鐘司に) さすがに百万は無理だが、俺も少々出させてもらった。

メリー・クリスマス、長門！(長門を抱き締める)

おいおい、抱き締めるなら、俺じゃなくて、碧にしろよ。

(鐘司に) 私もちよっとだけ協力させてくれ。(籠に金を入れて) おっと、

私は抱き締めなくていいぞ。

メリー・クリスマス、川地さん！(川地を抱き締める)

お兄さん！

…：雪也。雪也！(雪也を抱き締める)

メリー・クリスマス、お兄さん。

でも、なぜおまえがここにいるんだ。洋代さんは今、船の上にいるって。

ついさっきまでいたんだよ。デッキでワインを飲んでたら、海の上をモーター

ボートが走ってきて、よく見たら、洋代が操縦してたんだ。

(鐘司に) お義姉さんから事情を聞いて、すぐに雪也が乗ってる船に駆けつ

洋代

雪也

鐘司

雪也

鐘司

雪也

鐘司 けたんです。それから羽田へ行つて、飛行機をチャーターして。笛田まで一時間もかかりませんでしたよ。

雪也 (雪也に) 俺のために駆けつけてくれたのか。

洋代 お兄さんは僕の命の恩人だからね。洋代。

鐘司 (鐘司に) これ、使ってください。五百万には全然足りないんですけど、手元に現金はこれしかなくて。(封筒を差し出す)

洋代 (受け取って、封筒の中を見て) これしかつて、中身は全部一万円札じゃないか。

鐘司 百万入ってます。何も言わずに受け取ってください。私たちの感謝の気持ちです。

鐘司 メリー・クリスマス、洋代さん！(洋代を抱き締める)

そこへ、ゆかりがやってくる。

ゆかり

辺見先輩。

鐘司

ゆかり君、なぜ君がここへ？

ゆかり

これ、よかつたら、受け取ってください。(封筒を差し出す)

鐘司

(受け取って) 気持ちはいけれど、このことを堀田さんが知ったら。

ゆかり

それは大丈夫。こっちは伯父からです。(封筒を差し出す)

鐘司

(受け取って) 堀田さんから？

忠子

中身は？

鐘司

(封筒の中を見て) 五百万入ってる。ゆかり君、この金は本当に堀田さんが出したのかい？

ゆかり

私、伯父を脅迫したんです。辺見先輩を助けてくれないなら、堀田不動産を辞めるって。そうしたら、渋々出してくれました。あ、これは伯父からの伝言です。礼はいらない。次は必ず潰してやる。

忠子

お好きにどうぞ。(封筒を取って) でも、うちの会社はそう簡単には潰されませんよ。

鐘司

ありがたい、ゆかり君。この恩は一生忘れない。

ゆかり

気にしないでください。辺見先輩は私にとつて、大切な人です。その人が困ってるのに、黙って見過ごすわけには行きません。

鐘司

メリー・クリスマス、ゆかり君！(ゆかりを抱き締めようとして、碧に) いかないかな？

鐘司

メリー・クリスマス、ゆかり君！(ゆかりを抱き締める)

そこへ、鈴花がやってくる。

鈴花

お母さん、この騒ぎは何？

碧

鈴花、あなた、寝たんじゃなかったの？

鐘司

お客さんが来たのかと思って、着替えてきたの。

鈴花

メリー・クリスマス、鈴花！(鈴花を抱き締める)

鐘司

お父さん、もう怒ってないの？

二谷

さつきは済まなかったな。でも、お父さんはもう大丈夫だ。二谷さん、遅くなりまして。五百万です。確かに。

鐘司 二谷 これです、脱税の容疑は晴れましたか？
ええ。あ、ちよっと待ってください。ご迷惑でなかったら、私にも出させて

鐘司 二谷 ください。（籠に金を入れる）
ありがとうございます。

二谷 あの、メリー・クリスマスは？

鐘司 メリー・クリスマス、二谷さん！（二谷を抱き締める）

忠子 鐘司、これで会社は大丈夫だね？

鐘司 鐘司。今日だけじゃない。これから先、何が起きても、絶対に乗り切ってみせる。

碧（鐘司に）じゃ、みんなで乾杯しましょう。クリスマスをお祝いして。

鐘司 碧、ありがとうございます。（碧を抱き締める）

友枝 さあ、皆さん、乾杯をしますから、グラスを持ってください。

みんなが乾杯の用意をする。

鈴花 お父さん、ぬいぐるみに鈴はつけてくれた？

鐘司 鐘司。ごめん、まだだった。乾杯が終わったら、つけるから。（ポケットから鈴を

取り出して、下に落とす）

鈴花 あ、鈴が落ちた。（鈴を拾って、リンと鳴らす）

鐘司 （ポケットから紙を出して）この紙は何だ？

碧（読む）「辺見鐘司様、羽をありがとうございます」

鐘司 お礼を言うのはこっちの方だ。メリー・クリスマス、シリウス！

みんながグラスで乾杯をする。バス停で、天使たちも乾杯をしている。シリウスの背中には羽がついている。その羽に、祝福の雪が降り注ぐ。

∧ 幕
∨